20年出会い重ねて広がる未来

奈良・人と自然の会

目　　次

明るく楽しく力合わせて
壮春力歩−5 年間を振り返って一
祝辞
ならやまに寄せて
次世代との絆
思いを語り合う〜座談会〜
会のこれから
会員の思い（アンケートから）
活動の足跡
活動足跡写真・新聞記事
会員名簿（2022 年 2 月末現在）
編集後記

表 紙 揮 毫　池山怜子
キャッチフレーズ 鈴木末一
ロ ゴ マ ー ク 戸田博子
挿 絵 カ ッ ト　岩崎雅子

明るく　楽しく　力合わせて

千載 輝重

＜これまでの歩み＞

20 年前の 2001 年９月、当会は自然を愛する人たち 45 名が、その大切さ素晴らしさを後世に伝えたいとの思いでスタートしました。当初は自然観察や歴史文化探索が中心でしたが、生駒棚田再生や国有林整備など環境保全活動にも参加するようになりました。

2007 年、奈良県の「歴史的風土景観形成事業」に応募、委託を受けることで、活動の拠点として「ならやま」という場を得ることができました。雑草生い茂りゴミ捨て場とも化していたならやまに、先輩たちは開拓者のように立ち向かいました。目の前の難関に会員が一丸となって汗を流す姿が眼に浮かぶようです。

その後、ならやまという拠点を得たことで、地域住民の方との一体的活動を目指すようになり、会員数は急増、また、活動に賛同いただく諸団体からのご支援もあって、活動は急速に拡大しました。今では、里地には水田、畑、草原、竹林、小川、ため池が蘇り、山林でも枯死木が整理されて実生から育った苗木による植樹も進められ、もとあった里山の原風景が再現されています。また、奥に広がる自然林にも観察路が作られ、多様な植生が守られています。

一方、発足時の原点である自然文化活動も、月例研修会、自然観察会として、会員自らが楽しみ、実地に感動を覚えながら研鑽に努めています。また、次世代を担う子供たちに自然との触れ合いを通じてその大切さを伝える活動も活発に行っており、その伝承の場としてならやまも重要な役割を果たしています。

＜全国区へ＞

こうした活動はこれまでに様々な形で評価され表彰をいただいてきました。中でも 2021 年の秋の褒章でいただいた緑綬褒章は 20 周年を祝い、新たな歩みを進める大きな励みとなりました。また、里山で私たちと共生する生き物を集約した図録は、内外で好評を得、それをきっかけに全国紙でも紹介されるなど、当会の知名度はまさに全国区となりました。

＜新たな歩みへ～強い集団として＞

さて、私たちは今どこにいるのでしょう？2001～2006 年の創成期、2006～2011 年のならやまという拠点を得て活動が軌道に乗った成長期、2011～2016 年のナラ枯れという大きな障害も乗り越え活動範囲が拡大した成熟期、続くこの５年間は前半では新たな取り組みもでき、コロナ禍に大きく影響を受けつつも里山を守りたいとの思いで乗り切った円熟期と言えるでしょう。そのあとは？

組織のサイクルは、創成期、成長期、成熟期のあとには衰退期となっています。成熟期には成長期に見えにくかった課題が顕在化し、対応を誤ると衰退し崩壊に至るということです。

私たちの資源はならやまという「場」、ご厚志としていただく「志金」、それに何よりもそこに集まる「人」です。昨年実施したアンケートでは、会員の皆さんは「仲間」を求めて参加しています。当会は明確な目標に向かう強い組織ではなく、目的を共有する「強い集団」だと思います。その強みは「草一本を引いてくれてありがとう」「ゴミ一つを拾ってくれてありがとう」という「仲間への尊敬と感謝」です。この仲間とならば「力をあわせる」ことができるとの気持ちが根底にある限り、少しずつでも前進することができます。

そして、その歩む道は間違いなく自然環境保全と社会貢献につながり、地域の方々や志を同じくする諸団体の皆さまとの輪が広がることで、力強い歩みとなるものと信じています。

どうかこれからも共に歩んでいただきますよう心からお願い申し上げます。

壮春力歩

－5年間を顧みて－

顧問　鈴木 末一

２０１６年３月、会長職についての要請を受けた。以前にもあったが、今度は固辞することはできず、引き受けざるを得なかった。活動に不可欠の人材、資材、資金の三本柱について思いを巡らせた。まず人材は多士済々であり、他の団体などとは比較にならないほど類を見ないものである。問題は資材と資金であった。会費など自己資金だけではとてもやりくりができるはずはない。やはり助成金に頼らざるを得ないのだ。引き継いだばかりの年度はともかくとしても、次年度からのことが頭をよぎる。早速助成金関係の情報の収集などに努めた。そして思いの丈をぶっつけて、これで大丈夫だろうと自己満足しつつ申請した。一日千秋の思いで朗報を待った。しかし、結果は、甘くはなかった。思い詰めた挙げ句に、助成金の申請を受ける業務に携わっている方に助言をお願いした。返ってきた意見は厳しかった。「活動の方向性などが、自己満足に留まっていて、地域など外部への波及効果が見えてこない。助成対象まで到達できていない」というのだ。

「アウトプット・アウトカム」。こんな耳慣れない言葉が各種助成金の説明会では、ごく普通のように使われていた。助成金を活かした活動によって、いかなる変化が起こり、その変化によって、いかなる成果(効果)が生まれ、その成果が団体内だけに認められるものではなく、地域社会などにどのように波及していくのか、などが明確でなければならない。つまり、目的や目標を明確にするとともに、主体的な活動によって生み出されるもの、即ち成果が明確でなければならない。こうした一貫した基本構想を堅持し、助成金には志があるという意味の「資金は志金だ」との思いを込めて申請するようになり、その後は、ほぼ順調に助成していただけるようになった。

次に人材。多士済々と言うものの、個性とニーズには、計り知れない重みと深さがある。では最大公約数としてどこを着地点とするのがいいのか、自問自答の日々が続いた。普段の何気ない会話の中から真意をくみ取る努力が求められる。個々の意思に基づいて展開するボランティア活動こそが重要な要素になる。自発的な考えを尊重するが故に合議制を採ることも多い。しかし数々の課題や問題が発生しやすい。だから適切なコミュニケーションの必要性がある。相互理解につながり、共感を生み、真に必要な活動の姿を見出すことができる。この観点からグループミーティングを取り入れ、重視した。

そこで、「人の和」「創造」「行動」の三つのキーワードを大切にした。立派な組織体であっても、そこに集う人が機能していること、つまり豊かな人間性が醸成されていないと形骸化しかねない。谷間を補完し合い、共助の志で接し合うことで連帯意識も高まるはずである。一つの行動が百の理論よりも優ることがある。

このような基本理念をバックボーンとして職責を全うするべく努めてきたつもりであった。しかし、理想通りにいかなかったことも多々あり、多くの課題を次にバトンタッチせざるを得なかった。自省の念で一杯である。

ところで、誇らしくてうれしいこともあった。「ならやまは全国区」にスキルアップすることができたのではないかということである。緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰、緑綬褒章の受章である。社会的な認知度が格段にステップアップし、ひたすら夢と理想に向け共に汗を流してきた志を同じくする個性集団にとって、与えられた使命の重大さを再認識する機会となった。また、朝日新聞のコラム「天声人語」では「智恵と経験は一万二千歳を超す」と、市民目線での最高の評価をいただいた。

課題はまだ山積している。それらを一つ一つ解決していくためには、「良識ある人間性」を常に念頭に置き意思疎通を図っていくことが肝要ではないか、と思う。

一粒の種から芽が出て、少しずつ成長していく姿を見つめられるのを楽しみとして・・・。

創立 20 周年を祝って

奈良県知事
荒 井　正 吾

この度、奈良・人と自然の会が創立 20 周年の記念すべき節目を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

貴会におかれましては、平成 13 年に創立されて以来、植樹や間伐等による自然あふれる里山の整備や、地元の小学生を招いての自然観察会などの環境教育等に積極的に取り組まれ、景観・環境保全を通じて地域に貢献してこられました。

また、平城宮跡歴史的風土特別保存地区内において、平成 19 年より県との管理協定に基づき、県有地内の間伐や植樹による適切な里山管理、田畑の復元など精力的に活動いただき、県の自然環境と歴史的景観の保全に並々ならぬご尽力を賜っており、歴代会長を始め、会員の皆様の長きにわたるご活躍に対しまして、深く感謝と敬意を表します。

さて、奈良県では、豊かな自然と歴史との共生や美しい景観と持続可能な暮らしの創生を目的として、「きれいに暮らす奈良県スタイル」を掲げ、多様な主体が連携・協働する「オール奈良」による実践活動を推進しています。

その中の重要項目の一つである「奈良らしい景観」づくりにおいては、「奈良県植栽計画」を平成 25 年度に策定し、「なら四季彩の庭」づくりを理念に、県土を一つの庭と見立て、植栽等による四季折々に彩りあふれ、魅力ある奈良県づくりをめざし、取り組みを進めているところです。

しかしながら、まちと自然とをつなぐ重要な景観資源である「里山」は、近年の生活様式の変化等により、雑木・竹林等の繁茂による荒廃が進み、地域の魅力低下に繋がっています。「作庭四部管理六部」という言葉が表すように、自然を守りながら美しい景観を保つためには、適切に「管理」することが重要であり、貴会のような県土や自然に対する愛情と熱意ある活動は、奈良県の景観づくりにおいて、なくてはならない存在であると感じています。

こうした中で、令和３年秋に、貴会の長年にわたる地域貢献、環境美化への功績が称えられ、緑綬褒章を受けられましたことは、誠に喜ばしく、この場をお借りし、お祝い申し上げますとともに、地域の魅力ある景観・環境づくりの旗振り役として、一層のご活躍を期待申し上げます。

県といたしましても、誰もが安心して快適に暮らすことのできる、もっと「きれいな奈良県」づくりを追求し、豊かな歴史文化や自然環境を次世代に引き継げるよう、皆様と共に取り組んでまいりたいと考えています。より一層のご理解とお力添えを賜りますようお願いいたします。

結びに、創立20周年を契機として、会員皆様の相互の親睦が更に深まり、今後の活動が一段と実り多きものとなりますことを期待いたしますとともに、奈良・人と自然の会の今後ますますのご発展、会員皆様のご活躍を心から祈念し、お祝いの言葉といたします。

創立 20 周年に寄せて

奈良市長
仲 川　げ ん

「奈良・人と自然の会」が創立 20 周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

平成１３年９月に､「私たちは大和の自然を愛します」を合言葉に発足され､20 年にわたり本市の自然環境保全活動にご尽力をいただくとともに、市政の推進にも格別のご理解・ご支援を賜っていることに対しまして、深く敬意と感謝の意を表する次第でございます。

発足当初は、東海自然歩道の散策や自然観察、歴史探訪等の研修を中心に活動され、平成１６年からは忍辱山町の国有林間伐整備事業を通じて、地域住民の皆様との活動をスタートされました。

さらに、平成 19 年には古都保存法により奈良県が買い入れを行ったならやまの県有地を「ならやま里山林景観整備保全事業」として受託され､「ならやま里山林」を活動拠点に、植栽緑化や草刈､清掃など積極的に活動されました。お蔭をもちまして、荒涼としていた里山林も今日では里山本来の姿を取り戻しつつあります。

この活動が高く評価され、平成２３年１１月２０日には、平城宮跡で開催されました第３５回全国育樹祭において､「国土緑化推進機構会長賞」を受賞されました。

この他､野鳥･植物･昆虫･樹木調査により、里山の現状を把握され、近畿大学農学部と協働して、絶滅危惧種に指定されている「ニッポンバラタナゴ」の育種に取り組まれ、近畿大学北川准教授より「ニッポンバラタナゴの里親認定書」を授与されたのをはじめ､「ならやま里山林」の再生に向けた活動により、この分野において多大なる功績を残してこられました。

本市といたしましても、奈良盆地を囲む緑あふれる大和青垣の一部をなす春日山、三笠山、若草山等の丘陵と、その稜線の下部に位置する里山林も重要な構成の一つとなっていることから、この美しい丘陵や里山林の姿を将来に残していくため、古都保存法や奈良市風致地区条例により、適切な管理や開発防止に努めているところです。

一方、春日山原始林をはじめとする山林でのナラ枯れが進行し森林での荒廃が目立つ状況の中、平成 22 年より森林技術センター等との協働によるナラ枯れ調査や対策活動、里山林再生に向けた皆伐萌芽試験の実施や、ならやま里山林中心部の部分皆伐と植樹などの懸命な取り組みにより、平成 30 年には里山や森林の維持再生に成果をあげられました。

また､会の理念の一つである「地域貢献活動」では､「小学生の森林環境教育」「水稲栽培体験実習」等の関係団体のイベントなどにも積極的に参加をされ､「地域環境保全功労者表彰（環境大臣）」「平成 29 年緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」､そして令和 3 年秋には緑綬褒状など様々な褒賞を受賞されており、環境教育面でもすばらしい活動の成果を残されています。

今後も、関係団体等と連携して、さまざまな創意工夫を凝らしたイベントを開催していただき、里山林の再生に留まらず、奈良市の環境保全に対して、より一層活動の場を広げていかれることをご期待申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立20周年、おめでとうございます

シニア自然大学校
代表理事 金戸 千鶴子

「奈良・人と自然の会」創立 20 周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

2001 年 9 月、シニア自然大学校修了生 45 名が“大和の自然を愛します”を合言葉に一粒の種をやまとの地に蒔き、丹精込めて育てられた「奈良・人と自然の会」が地域市民の会員とともに大きく発展し、めざましい成果を上げておられますことはシニア自然大学校として誇りに思うとともに深く敬意を表します。

奈良県の「ならやま里山林景観整備事業」については、本校が保全活動支援の一環として主催している環境保全活動発表会（2017・2018 年度）で前会長の鈴木末一様から、樹木管理や間伐技術の研修をしながら歴史的風土の保存及び健全な里地・里山林景観を創出するために熱心に取り組まれている様子を発表していただきました。また、奈良県野生絶滅種の「ニッポンバラタナゴ」や水生生物の保護、ナラ枯れ問題への取り組みなど自然環境の保全に地道に取り組まれていること、さらに生物多様性のある里地・里山を地域社会と連携して保全を進め、「歴史的風土を次世代に受け継ぐ」ために近隣小学校との交流に励んでおられるご報告に敬服いたしました。

私も一度、辻本信一事務局長に里山林や自然の森、畑などを案内していただき、まるで桃源郷に迷い込んだような思いにとらわれました。

今後も、貴会が 16ha の広大な「ならやま里山林」を拠点にしてさらなる発展と地域の自然環境保全活動にますますご貢献されることを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

次世代へさらなる環境活動を

特定非営利活動法人日本ＮＰＯセンター
代表理事　萩原 なつ子

このたびは創立 20 周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申しあげます。

奈良県全体をフィールドに、実に多様な自然環境保全活動に精力的に取組むメンバーの方々のバイタリティに敬服するとともに、大和の自然を愛でる気持ちにとても感銘を受けております。

「奈良・人と自然の会」の皆さまと日本 NPO センターのご縁は、東京海上日動火災保険株式会社と環境パートナーシップオフィス（EPO）、日本各地域の環境 NPO、日本 NPO センターが協働して取組む「Green Gift プロジェクト地球元気プログラム」の参加団体となったことから始まりました。

このプログラムは地域の環境問題の解決や子どもの支援に取組む NPO が地域の多様な主体と連携して、主に親子で体験できる環境活動を応援するものです。「奈良・人と自然の会」に参加いただいたのは、ひとえに創設時から自然環境ボランティア団体として、長年にわたり地域の自然環境の保全活動や自然環境教育を地道に実践してきたこと。なによりも地域住民、そして子どもたちがメンバーと共に森づくり、農業、ビオトープづくりなどの体験をすることによって、自然の豊かさや不思議さを感じ、心の豊かさを育んでこられたからにほかなりません。

次の世代に素晴らしい大和の自然を引き継ぐために、貴団体の「楽しく！ 明るく！ 元気に！」そして「無理をせず」をモットーに、今後ますますのご活躍を期待しています。

笑顔を生み出す宝の里

公益財団法人都市緑化機構
小松　尚美

「共有地の悲劇」という言葉があります。多数者が利用できる共有資源が乱獲されることによって資源の枯渇を招いてしまうという理論で、多くの社会的課題、特に環境問題を語る時にその説明に用いられます。ならやまも、特定の個人や組織の持ち物ではなく社会の共有資源ですが、共有資源であるがゆえに不法投棄の温床となり適切な管理がなされずに荒廃してしまったのではないでしょうか。

そのような状況を解決してきたのが「奈良・人と自然の会」の 20 年だったと思います。「奈良・人と自然の会」は広く門戸を開きつつ、みんなが合意できる緩やかなルールの下、この地を豊かにするために皆さんが日々奮闘していらっしゃいます。加えて、環境学習などを通じ、子どもたちをはじめ地域のたくさんの方々に、ならやまが生み出すたくさんの宝を分け与え次世代にまで繋げています。何より、170 名ものたくさんの会員のみなさんが、日々嬉々として活動に取組み、心身の健康を増進し人生の質を高めていらっしゃいます。個人としても組織としても必ずしも平たんとは言えない道のりを歩んで遂げた 20 年だったのではないでしょうか。

この価値は、なかなか定量化できないものの、多くの人々が納得し共感するところだと思います。「奈良・人と自然の会」がこれまで多くの表彰を受け、数々の名だたる企業からの助成を受けているのは、みなさんがこの価値に共感し敬服しているからにほかなりません。このような活動に、多少なりとも関わることができましたのは、私にとっても大きな喜びで誇りです。

20 年で、ならやまは、悲劇ではなく多くの笑顔を生み出す宝の里になりました。この先も、笑顔を生み続ける宝の里であり続けますように。

イベントで子どもたちも地球も元気

東京海上日動火災保険株式会社
奈良支店長　横澤　雄三

このたび、奈良・人と自然の会様が創立20周年を迎え、記念誌が発行されますことを心よりお祝い申し上げます。

さて、弊社は「Green Gift 地球元気プログラム」として、2019 年 10 月より奈良・人と自然の会様と協働させていただいております。「Green Gift 地球元気プログラム」とは、弊社が行う「Green Gift」プロジェクトの一環として行う国内における環境保護活動の名称です。「Green Gift 地球元気プログラム」は主にお子様を対象とした環境保護活動であり、お子様たちが環境問題についてかかわるきっかけを作ることを目的としております。

奈良・人と自然の会様と弊社の協働イベントは、ならやまベースキャンプの素晴らしい自然の中で開催されております。普段は触れることがないような里山が私たちの生活しているすぐそばにあることに驚かされ、また、この里山を奈良・人と自然の会様が心を込めて管理されていることに感動を覚えます。

代表的な協働イベントである「夏だ！休みだ！里山で遊ぼう」には、多くのお子様が参加しております。このイベントを通して里山の役割を学び、豊かな自然に触れることで「Green Gift 地球元気プログラム」が目的としている、お子様の環境問題への関心が高められているものと考えており、奈良・人と自然の会様には感謝申し上げます。

弊社は、今後も奈良県の環境保護と持続可能な社会に貢献して参る所存です。引続きよろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、奈良・人と自然の会様の一層のご発展と、皆様方のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

ともに豊かなふるさとづくりに貢献を

公益財団法人コメリ緑育成財団
理事長 捧 雄一郎

この度は、創立20周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。「すべては次世代の子供たちのために 里山で、遊ぶ、学ぶ、つながる」を掲げ、長きにわたり活動されてきました。里山林の景観整備と保全をはじめ、積極的なイベント等の開催により、里山の自然に触れる人と人とを結んでいく活動は、大変素晴らしいものであると思います。

コメリ緑育成財団は、2018年から5年にわたり助成をさせていただきました。毎年2月の立春に新潟市で行われる助成金贈呈式にもご参加いただいております。第30回の贈呈式では、当時の会長であられた鈴木様から、活動に対する熱い思いとこれまでの活動の一端をご紹介いただきました。

コメリも、日頃お世話になっている地域の皆さまへ感謝の気持ちを込めて、利益の1%相当額を社会還元し、緑化活動や自然環境保全活動にお役立ていただいております。この活動も、おかげさまで32年間続けることができています。まずは本業であるホームセンター事業をきっちりと行うことで、この1%還元活動が続けられています。地域に貢献する活動は、継続することに意味があるのだと思います。

政府は、2050年までにカーボンニュートラルの実現を目指すことを宣言しました。われわれを取り巻く社会環境も大きく変化し、環境問題に対する関心もより高まってきています。時代の変化に対応しながら、コメリ緑育成財団の活動が、緑あふれる豊かなふるさとづくりに少しでも貢献できればと思っております。

奈良・人と自然の会の皆さまの、今後のますますのご発展とご活躍を祈念いたします。創立20周年、誠におめでとうございました。

さらなる『緑のコミュニティ』づくりを

第一生命保険株式会社
奈良支社長 布崎 嘉樹

梅の香りが爽やかに漂う春暖の候、皆さまにはお元気でご活躍のことと存じます。

さて、このたびは奈良・人と自然の会の創立 20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

小職と奈良・人と自然の会との出会いは 2021年11月となります。弊社が特別協賛しています「緑の環境プラン大賞」ポケットガーデン部門コミュニティ大賞を見事受賞されたことがきっかけです。これは、都市の緑 3 表彰のひとつで、緑豊かな都市環境で育まれる人と自然とのふれあいやコミュニティ醸成等の実現に資する緑化プランについて、優秀作を表彰するとともに、そのプラン実現のために緑化整備費を助成するものです。特にコミュニティや憩いの場を創造するポケット・ガーデン部門は、日常的な花や緑の活動を通して、地域の活性化や子どもたちへの情操教育、身近な環境の改善に寄与するプランとして募集しました。作品名は「古都に広がる里山の彩り」です。奈良・人と自然の会によって今は地域住民の方が訪れる憩いの場となったならやま里山林をさらに、子どもたちが学び、遊び、つながるための場として活用するとともに、多くの生き物が生息できる環境を育む計画として見事に受賞されました。

ご挨拶に訪問させていただいた際、そこには千載会長初め、目を輝かせて夢を語る元気いっぱいのシニア層の方々がたくさんいらっしゃいました。小職自身も大きな刺激を受けることができました。今後も弊社に協力できることがあれば、何なりとご協力させていただきたい気持ちでいっぱいです。いつまでもお元気で。今後の皆さまのさらなるご活躍、ならやま里山林のさらなる発展を祈念しております。

ひとつしかない地球
次世代に引き継ごう

公益財団法人イオン環境財団
専務理事兼事務局長 山本 百合子

「奈良・人と自然の会」様が創立20周年を迎えられ、心より御祝い申し上げます。

貴団体は、古都にふさわしい日本の原風景の再生に向けて、平城宮跡歴史的風土特別保存地域をフィールドとし、ならやま里山景観整備に取組まれてきました。広大な活動地を、「ならやま里山林」「ならやま自然の森」「彩の森」「佐保自然の森」「実りの森」の5地区に分け、地区ごとの特性を活かした整備をされ、荒廃が進んだ雑木林は、自然豊かで、また自然と人との共生がかなう持続可能な里山に修復されましたことに、改めて感銘を受けております。

私共、イオン環境財団は、設立以来、事業活動のひとつとして国内外で地域に根差しボランティアの皆さまと共に環境活動をおこなう非営利団体へ環境助成を行ってまいりました。貴団体と本助成を通じ、ご縁を頂戴したことに感謝申し上げます。

貴団体が、今後も里山づくりを推進され、現代社会の環境課題に向き合い、今後ますますのご発展をされますことを祈念申し上げます。

ひとつしかない地球を、共に守り次代に引き継いで参りたいと存じます。

ともに環境保全活動の推進へ

市民生活協同組合ならコープ
理事長　吉田 由香

「奈良・人と自然の会」の創立 20 周年、また「ならやま景観整備活動」15 周年を迎えられましたこと、心からお喜び申し上げます。

貴団体とならコープは、2003 年 4 月に開催したアースデーの大和川クリーン作戦を端に、「アースデーin なら」や学習会の開催などで協働し、2007～2011 年度には、奈良市奈良坂の活動地域で資源循環型社会を目指した「菜の花プロジェクト」の活動を組合員と一緒に実施しました。

2005 年度から、ならコープではプラスチック資源の使用量削減運動として、レジ袋代金を環境資金とした助成金制度「環境保全活動助成制度」を始めました。当初からご参加くださった貴団体は様々な環境保全活動を実施され、2009 年からは「ならやま景観整備事業」においてビオトープ池整備および絶滅危惧種「ニッポンバラタナゴ」の育種環境の安定化を継続的にすすめ、環境保全活動助成金をお役立て下さっています。貴団体の環境保全活動への志・コロナ禍の制限のもと継続的な活動を行う努力に、心からお礼申し上げます。

さて、2020 年 9 月に策定した「ならコープの 2030 環境ビジョン」では、①奈良の豊かな自然を次世代の子どもたちに残す②大量生産・大量消費・大量廃棄の使い捨て文化からの脱却③国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）の具体化④エネルギー問題・ごみ問題「食品ロス・海洋プラスチック」の解決の 4 点と 2050 年にゼロエミッションを実現することを掲げています。

今後ともならコープとともに、環境保全活動の推進に邁進していただき、昨今の環境課題に対し、奈良でご活躍される貴団体の益々のご発展と関係者の皆様の一層のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

ナラ枯れへの対応に感銘

神戸大学農学研究科
教授　黒田 慶子

活動 20 周年おめでとうございます。貴会との出会いは 10 年以上前に遡ります。私は当時、森林総合研究所に勤務しており、マツ枯れやナラ枯れについて、被害防止策の検討や指導をしていました。森林の病気は、枯死木処理や薬剤による阻止が極めて困難で、予防医学的に被害が出にくい森林に誘導することが大事です。そのようなことを、行政や整備活動の方々にお伝えしていたところでした。

2010 年に阿部会長さんから、ナラ枯れの相談がありました。里山林は、炭や薪を使わなくなった 1950 年代以降は放置されました。コナラやクヌギなど（ドングリのなる木）の高齢・大径木が感染して枯れやすく、若木は枯れないことが判っていました。ナラ枯れを止めるには「若返り」しか手はないので、「枯れる前に伐採すると切り株から萌芽（ひこばえ）が出て、木は再生します。枯れたら再生しません」と伝えたところ、会では伐採し、薪にして利用するという判断をされました。生きている木を伐ることを決断できない場所が大半だったため、科学的な説明を理解して行動されたのが印象的でした。

2012 年 11 月に森林生態学研究者とともに、伐採後の萌芽更新の様子を見せていただきました。会の中では大木伐採への反対があったかも知れません。また、奈良県からの委託で制約があった中で、「里山の存続に効果のあることはやる。伐採木は捨てずに使う」という姿勢に、感銘を受けました。人が作ってきた里山林は、自然に任せても原生林にはならず、また、現代人の感覚で「綺麗に見せる」管理をしても持続しません。今後も、里山管理の歴史を理解し、資源利用と、将来につながる管理を目指していただければと思います。

20 周年おめでとうございます!

京都大学フィールド科学教育研究センター
教授　徳地 直子

この度は、奈良・人と自然の会、創立 20 周年、誠におめでとうございます。

「ならやま」は外部からはすぐにはそれとわからないのですが、一歩入ると別世界のような素晴らしい景観に引き込まれます。そして景観が美しいだけではなく、懐かしい気持ちになります。「ならやま」が美しいのは里山としての機能を果たしているからで、「ならやま」がもつ里山のひな型のようなものに懐かしさを感じるのではないかと思っています。

里山は、自然の遷移に逆らって人が手を入れ、使い続けることで、その機能や姿が維持されます。そのため山を使う必要がなくなった現代では、かつての里山は単なる雑木林になっていきます。鈴木末一前会長様はじめ皆様より「ならやま」についてお話を伺い、書かれたものを読ませていただきました。皆様が本当に心を尽くして、手を入れた結果、「ならやま」が美しい景観を備えた里山となったことがよくわかりました。

しかし、奈良・人と自然の会の皆様はその機能や姿を保つために「ならやま」に手を入れているのではないでしょう。使い、手を入れることに楽しみや喜びを感じておられるのだと思います。暮らしを楽しみ、日々の喜びを「ならやま」で見つける人がいる限り、「ならやま」は美しい里山であるように思います。そして、これからも「ならやま」が多くの人にとって日々の喜びを取り戻す場所であり、「ならやま」が里山であることを念じています。

未来へ引き継ごう素晴らしき里山空間

近畿大学農学部環境管理学科
准教授 北川 忠生

創立 20 周年、活動 15 周年の大きな節目を迎えられますこと、心よりお祝い申し上げます。

貴会と私たちの間のご縁は、平成23年奈良県自然環境保全功労賞を共に受賞したときからはじまり、大変深いご愛情をいただきながら、この間10年にわたる絆で結ばれるものとなっております。貴会との連携の中心は、言うまでもなくビオトープエリアでのペタキン（絶滅危惧種の淡水魚、正式名称：ニッポンバラタナゴ）の保護活動（新しい生息池、生態系の創出）ですが、ならやまフィールドの全体の活動がこの取り組みにもつながっており、少しずつですが目標に向けて前進を積み重ねさせていただいております。このようなすばらしい環境が創出され、深い懐で迎え入れてくださるこの里山空間は、現代においてかけがえのない場所であると感じております。世代を超えて、私も学生たちも「ならやまフィールド」の美しくて暖かい里山にすっかり魅了されています。まさに自然の恵みと人間の生活や歴史・文化の接点における調和と、それらを未来へひきつぐ重要な役割を果たしている場がここにあります。

貴会の皆様には、令和 3 年 10 月には、私たちが取り組む猿沢池での興福寺の古瓦を利用した魚礁造りにもご参加いただきました。魚礁は 7、5、3、2 枚という素数を組みあわせた 17 枚の瓦からなります。素数は、割ることができない、不規則に無限に出現する数です。すでにある会員皆様の硬い絆とともに、ご縁をいただいた私たちとの絆もより深まりますよう、また、活動が今後の新たな出会いとともに未来に広がり発展しますことを、みなさまが込められました墨書きへの願いの成就とともにお祈り申し上げます。

今後も環境保全の根っこを支えて

奈良テレビ放送
報道担当シニアアドバイザー 小池 重二

去年（2021 年）の 10 月終わりのある夜のこと。若い記者が「今日出た資料です」と分厚い紙の束を渡してくれた。それは令和 3 年秋の褒章に関する報道資料。内輪話になるが、叙勲や褒章などの受章者については、発令となる少し前に、マスコミに概要が伝えられ、それを元に取材を進める。資料に目を通すうちに飛び込んできたのが「奈良・人と自然の会」の文字。こんな時、馴染みの名前を見つけてニンマリできることは、ある意味、仕事冥利といえる。衆議院選が直前だったこともあり、残念ながら記者が現場に出向いての取材は出来なかったが、11月2日にはうれしいニュースを伝えることが出来た。

「私たちは大和の自然を愛します」をスローガンに、約 20 年に及ぶ「奈良人と自然の会」の活動。身近に接してきた者にとっても、ならやまの里山再生、子供たちへの環境教育など、その成果は目を見張るものだった。褒章はもちろん、緑化推進功労での内閣総理大臣表彰など栄誉は当然だ。

思えば数十年前まで、自然環境の保護の話などを口にすると「甘っちょろい理想論」などと冷たい眼でみられたものだが、今では「SDGs」が世界的な目標となるなど、環境への配慮なくしては、企業活動すらなりたたない時代となった。ただ、そんな時代にあっても環境保護の一番の土台は、目の前の自然を守ることや、子供たちに食や農、動植物の魅力を伝えることだと、私は考えている。その意味で「奈良人と自然の会」は、一番根っこにある大切な部分を地道に支えてこられたといえるだろう。

これからも、会のますますの躍動、期待しています。そしてテレビの取材で、また私個人の楽しみである、ならやまの生き物たちの撮影に、またお邪魔します！

創立 20 周年を祝して

奈良市佐保台地区自治連合会
会長　堀田 広子

「奈良・人と自然の会」創立 20 周年、「ならやま景観整備活動」15 周年を迎えられましたこと心よりお祝い申し上げます。

昨夏、佐保台地域ふれあい会館にて「奈良・人と自然の会」前会長　鈴木末一様、会長　千載輝重様より、活動の苦労話、素晴らしい人材の宝庫、毎月会報誌を発行されている事等お話を伺いました。平均年齢が約 75 歳の皆様が主体性をもち楽しく活動されることにより健康で自分の居場所があることは、素晴らしい連鎖となり、肩書など必要のない第二の人生を謳歌され楽しまれていると感銘いたしました。

私は数十年前、子ども達と一緒にサイクリングロードを走った記憶がありますが、お話を伺ってから遠のいていたサイクリングロードに行ってみました。残念ながらご活動されている様子を拝見することは出来ませんでしたが、道の両側は整備され、お花が植えられ、ビオトープがあり、さらには展望台までも作られていて皆様の活動が「楽しく笑顔があふれている」ことと感じました。野生生物の環境を守る自然と住宅の間にある奈良・人と自然の会の里山は、佐保台にとっては魅力的な場所で近くにあることはとても嬉しく贅沢な環境空間であると感謝申し上げます。

また、地域の子どもたちの自然環境教育にもお力を頂いているとお聞きしています。机上での勉強だけでなく実践体験する事の大切さは、未来ある子どもたちの人間形成にとても良い影響を与えて下さっていると思います。

今後も、体調に留意され、ならやま景観整備活動を楽しんでいただきたいと願っております。

末筆ながら、より一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

社会をつなぐタテ糸・シニアに敬服

奈良市佐保川地区自治連合会
会長 金野 秀一

奈良・人と自然の会が、この度、創立20周年、ならやま歴史的景観整備プロジェクト15周年の節目の年を迎えられ、一言お祝いを申し上げます。

会が創設されて以来20年。初代会長の川井秀夫氏や前任者の鈴木末一さんをはじめ歴代の会長のリーダーシップのもと、さまざまな困難の中を草創期より会を支えてこられた会員の皆様に最大の敬意を表したいと思います。

また、平成 29 年には緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰、昨秋には緑綬褒状受賞の栄に輝かれました。この受賞は、皆様方の努力と高い志に対する評価と受け止めさせていただいています。

さて、少子高齢化社会の出現によって、高齢化を嘆く人たちがいますが、私は、未来を開く世代の集まりだと思っています。人の集まりの社会構造を織物に例える方がおられます。

織物は、タテ糸とヨコ糸で反物として私たちの生活を支えています。このタテ糸とヨコ糸の関係を表して、「タテ糸は、高齢者・伝統・知恵」「ヨコ糸は若者・流行・知識」と言われます。

ヨコ糸は、右に左に動き回って柄を作り反物の価値を上げます。しかし。タテ糸は、動かずじっと見えない所で反物を支えています。この社会をつなぐのに最も大切なことはタテ糸がしっかりしていることだと思います。

先人の知恵をないがしろにする風潮。そんな時代にあって、「奈良大好き人間」が集まり、歴史的風土特別保存地区の景観を保全しながら、町中の里山の生態系を復活させる活動や、子ども達を育む様々な活動は、高齢者の生きがいと子供の未来をつなぐ活動だと思います。

終わりに、会の益々のご発展と会員の皆様のご健康とご多幸を心からお祈りいたしまして、お祝いの言葉といたします。

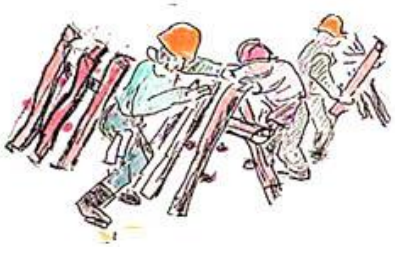
ならやまはだれのもの

ネットで囲まれたタナゴ池へ
入ろうとしているカワセミ

ならやまは標高百メートルほどの小山です。平城宮跡の北の端に位置しています。一歩足を踏み入れてください。のどかな昔の日本の風景を目のあたりにするでしょう。

鮮やかに彩どる若い木々を背に、古代米の稲穂の波、大和伝統野菜をはじめ昔から伝わる野菜の畑や花畑が広がります。麓にはハチの巣箱や薪を積む棚、淡水魚が育つ池。奈良・人と自然の会の仲間たちが、全ての生き物に愛情を注ぎ、「ならやま里山林」は自然を取りもどしたのです。

かつて、里山は人々の生活の場でした。薪は燃料、山菜は食材でした。植林に力を注ぎ、緑のダムと呼ばれるほどの保水力で、人々を災害から守ったのです。そこには自然の不思議さ、大切さが実感できる営みがありました。しかし、国土の半分近くを占める里山の多くが放置されました。ならやまも例外ではありません。当会が2007年、初めて訪れた時、コナラが大木になりすぎて、太陽の光をさえぎっていました。若い木は育たず、倒木だらけ、麓は竹やぶに覆われ、ごみ捨て場になっていました。



竹やぶや倒木の整理から始めました。山水の水路を引く人、シイタケ菌を打つ人、特用林産物の育成に挑む人。地道な活動は15年になります。平均年齢70歳のボランティア会員は170人に達しました。人の手が入り、多くの生物と共に過ごしてこそ里山です。

（「見つけよう自然のなかま
～ならやまの木々たち～」より）

次　世　代　と　の　絆

－里山で 遊ぶ 守る つながる－

栄光への憧れ

秘めたる若人の力躍り 育む未来遥かに拡がりて
　訪れし煌めく春に　我等の胸は喜びに満つる
抱かれし溢れる緑よ 時の流れに色褪せぬ間に
　仲間が集まる心の故郷に 明日の夢を切り開く

湧き上がる喜びに震え　行く末に光眩しく輝きて
　英知の門出の向こうは 新しき仲間達の尊い憧れ
まだ見ぬ世界の扉を開き 歩みゆく足跡に声高くして
　守らむ豊かな自然の恵みを あゝならやまに栄えあれと

(谷川萬太郎 作)

▲近畿大学生

▲佐保台小学校5年生▲

▲建築学生の面々(◎)と
当会会員たち(□)
(ZOOM 会議で)

◎　□　□　◎
□　□　◎　◎
□　□　◎　□
　　□

次世代の台頭、絆深まる

待ち望んでいた爽やかな風が、ならやまに吹き始めました。次世代の若々しい存在感と、その絆の深まりを感じます。

2009 年に始まった佐保台小５年生の体験学習「田植え」第１期生が、くしくも当会 20 周年の今年度、沖縄の小学校で教師としてスタートを切られました。ならやまの体験を活かして、自然との共生の大切さを教えておられます。「生き辛さを抱えた子供たちが、大地の恵みと、そこに生きる命に目を向け思いを馳せ、次世代へのバトンを渡せるように努力したい」と語ってくれました。

2012 年に奈良県野生絶滅危惧種ニッポンバラタナゴをビオトープに放流して以来、育種を手伝ってくれた近畿大学農学部の学生が2021年末、指導者の北川忠生准教授の講演会で当会会員とともに受講、懇親会で会員らと世代間交流をしました。世代が違っても、ともに学び、ともに話し合う楽しさ、喜びを感じ合ったかつてなかったひと時でした。

さらに、特筆すべきは、当会に2021年、現役の奈良大学生が入会したことです。「自然が好き」「奈良が好き」の学生たちです。当会の平均年齢から2世代ほども若い仲間。知恵を出し合い、センスを競い合って新しいものを築き上げたいものです。

15周年記念誌に、当会の創設者故川井秀夫さんは「将来展望の第一は『スムーズな世代交代』。高齢化が進むなか、新陳代謝による連続性が不可欠」と強調されています。今その兆しが生まれつつあります。　　（文責　岡田安弘、吉川利文）

「**里山に未来っ子の声こだま**：奈良市立佐保台小学校5年生体験学習の感想文です。(令和3年度)

里山に未来っ子の声こだま

とても貴重な体験をありがとうございます。
浅井奏瑛

お米作りに参加できませんでした機会があれば絶対やりたいです！　浅野千都

自分たちで作ったお米を食べたら、すごく達成感がありました。　Izuken

お米を作るご苦労がとてがもよくわかりました。稲泉汰一

貴重な体験をありがとうございます。　コーダス

素晴らしい体験をありがとうございました。　上月心露

手で作るお米のおいしさを、未来に伝えていきたいと思いました。　barami

田植えなど、貴重な体験をありがとう！　Puronguzu

米には、いろいろな種類があることがわかりました。
北浦瑠唯

この体験は、一生心に残ると思いました。　K.S

米作りは難しかったけれど、教えてもらってできました。ありがとう。　美月

田植えの時、やり方を教えてもらって上手にできました。ありがとうございました。　柚月

米作りの大変さが伝わってきました。素晴らしい体験ありがとうございます。　S.M

機械で作るごはんの一万倍温かみを感じました。ありがとうございました。　新村佳祐

田植えから稲かりまで、ご指導ありがとうございました。
高添勇希

お米作りはとても苦労すると感じました。　辻優希

米作りという素晴らしい体験をありがとうございました。
N.A

手伝ってもらって作ったお米で、すごく笑顔になりました。　中村陽和

貴重な体験をありがとうございました。　クロス

米作りの感動！これからは地域に貢献したいです。
たけのこの里

自分たちが作ったお米はとてもおいしかったです。
Muuni

手作りのお米はすごく温かみを感じました。　森口凱理

機械で作るお米よりおいしかったです。横澤隼人お米作りの大変さを知り、農家の方に感謝しています。
Sunaffuruzu

自分が一生懸命作ったお米はおいしかったです。
吉永萌香

「奈良・人と自然の会」の人たちのおかげで収穫できました。感謝しています。　黒い狼

時間をかけて作ったお米はぬくもりがあった！
堤穂香

若 い 息 吹 き

近年当会に「若い息吹き」が吹き込まれ始めた。この20年、かつてなかった新鮮な風である。

《建築学生の知恵》「建築の聖地」と言われる東大寺境内で2020年9月、全国の大学工学部などで建築や環境デザインを学ぶ25名によるワークショップ(体験型講座)が開かれた。奈良県庁の担当部局から当会に材料の支援要請があり、竹材を提供した縁で参加大学生との交流が深まった。環境保全に努める当会の活動に関心を寄せた学生が、20周年記念事業に協力したい、と申し出てくれたのだ。

ワークショップは、学生がキャンパスを離れて開催地に滞在し、地域の特殊性を課題に体験学習するのが目的。25名が8つの班に分かれて、東大寺の環境にマッチする小型で新鮮な建築物をつくった。3班と8班の素材は竹。京都工芸繊維大の衣笠恭平君をはじめ、東大、九州大、大阪工大、北九州大の計5人が、ならやまを事前に訪れ、景観、里山両グループの指導を受けて竹を切り出し、設計図に沿う寸法に切った150本を大仏殿に運んだ。

ワークショップが閉幕後、当会が翌年、創立20周年を迎えることを知り、東京理科大大学院の岩田采子さん、奈良女子大の佐久間実季さん、金沢大の天野萌絵さん、三重大の保坂日南子さんと衣笠君の5人が「20周年記念モニュメント制作会議」を立ち上げ、当会の記念事業委員会と合同会議を開いてきた。コロナ禍で集まることは避け、zoom 会議を続けた。

2021年6月に成案ができ、第32回「緑の環境プラン大賞・ポケットガーデン部門」に応募。同年10 月7日、公益財団法人都市緑化機構と一般財団法人第一生命財団から入選の内定通知が届く。

幼い子らを迎えるトーテムポール、丸太製のSLなどを中心とした「古都に広がる里山の彩り」という構想の「学びの広場」である。

《ペタキン君と近大生》2011 年6月12日、奈良県環境保全功労賞の受賞式で、近畿大学農学部の北川忠生准教授と阿部和生会長（当時）の出会いがきっかけとなり、絶滅危惧種のニッポンバラタナゴ(通称ペタキン)をならやまのビオトープでお預かりして育てることになった。

それ以前の2008年春、西池の復活に伴い、東側に水田を復活させた。2012年から水田をさらに東側に移し、その水田跡に本格的なビオトープを造成、ペタキンの育種に協力することになる。

羽尻嵩さんを中心に育種池の研究を始めた。蓄積した資料を元に新池の設計図を作成。里山グループなどの協力を得て必要資材の調達をし、掘削、杭打ち、築堤など、活動日以外の日にも連日のように取り組み、2012 年の3月に新池が完成。

新池にペタキンが放流され、育成が始まった同年6月7日は、当会と、指導役の北川先生をはじめ「北川教室」の学生との交流が始まった記念日でもある。以来10年間、毎年新しい専攻生と会員が、ペタキンの調査研究に努めている。

また、2021年12月、北川先生を講師に招き、6名の学生ともども研修会を催した。引き続いての懇親会では、6人の学生も参加。祖父母の年代に当たる会員たちと和やかな交流を繰り広げた。会の研修、懇親の場に学生が参加し、ともに学び、会員と打ち解けた交流をしたのは、異例であり、画期的だった。講演、懇親を通じ、池のヘドロで伝統野菜を栽培するという「北川プロジェクト」を一緒にならやまでも取り組もうという話が盛り上がった。

《現役大学生の入会》創立 20 周年の節目に、大学生の会員が誕生したのもビッグニュースだ。奈良大学文学部地理学科の村田康晟、塩井皓太の両君が2021年に入会した。

自然が好き奈良が好きな若者たちである。平均年齢 70 代の組織に、バトンを直接引き継げる世代の参加は何事にも代えがたい。新鮮な構想や若い世代の受け入れなどについて知恵を出し合う、いい機会だ。

バトンを渡す当会、受け取る若者たち。早期に持続可能な妙案を考えて取り組まなければならない。

（文責　岡田安弘、吉川利文）

“ならやま”水田の復活

子どもたちからの感想文集は私たちの宝物

平成 19 年春、奈良県有地 7.33 haの「ならやま景観整備事業」がスタートしました。この年11月「三井物産環境基金助成」に応募、その3カ年計画の中に「ビオトープ・水田の復活」を盛り込んだことが始まりです。

「ならやま里山景観整備」自体は平成20年3月、「三井物産環境基金」などの助成が決定したことで本格的に着手することができました。

ところが、水田復活について幹事会で協議に入ったのですが、話し合いは進展するどころか、課題ばかりが浮き彫りになり、混迷しました。というのも、ベースキャンプ地の隣の「畑」復活作業では、耕耘機の購入前でもあり、鍬やスコップなどで耕すという全くの手作業というか人力に頼る大変な作業を体験したこともあってか、「手作業などでの水田復活作業は無理だ」「従来の農業はもちろん、現在の水田作業を熟知した指導者がいなければ、私たちだけでは田んぼは作れない」「高価な各種農機具はどうするのか」「水利権はどのようになっているのか」「労力だけが大きすぎるのではないのか」など異論百出、議論は錯綜し続けました。

日本の自然は、田んぼと森という二つのコラボによって豊かな生態系を育みます。また、お米は日本人の生活の糧。「困難はあっても復活したい」という意欲だけが空回りしていました。

救世主は今の顧問鈴木末一さんでした。農機具の扱いも稲作の詳細もすべて体得しておられ「やりましょう」の一声で出発できたのです。これ以上ない指導者が声を上げてくれたのです。

「田んぼは環境教育の場、自然と親しむ入り口」「里山は子孫から借りている自然」などの信念を持った鈴木さんの発信と行動が水田復活の原動力でした。

翌年21年1月の幹事会で水田復活事業推進の了解を得て、「ならやま世話人会」で詳細を検討することとなりました。

慌ただしい春の諸準備の中、どのような「田んぼ」にするかが検討されました。佐保台小学校では、水稲をバケツで栽培する「バケツ稲」に取り組んでいましたが、夏場に枯らしてしまうなどの大きな問題を抱えていました。水本遼眞さんが、「ならやまで復活させる水田で、児童たちに体験させてやれないだろうか」と提案されました。

学校側も「是非」ということになり、当会としては地域貢献活動としての位置づけを大前提とすることで、学校との打ち合わせとともに、ならやま世話人会での話し合いもとんとん拍子で進展しました。

こうして平成21年6月4日、佐保台小学校5年生による、ならやまの水田「佐保台小ファーム」での田植えが実現しました。以来今日まで毎年ならやまの「田んぼ」で体験学習が続いています。当会は、準備をし、生育の見守りや管理を行なうなどサポートを行なっています。

佐保台小学校 5 年生は、水稲栽培についての事前学習に始まり、田植えや稲株の「分けつ」調査、そして収穫までの体験学習、また水中生物調査など様々な活動で学んでいます。年度によって学校文化祭での稲作発表展示もあり、地域の方々に深い感銘を与えてきました。児童らも稲作に付随する自然への深い理解や親しみを得ています。田植えなど初体験の子どもたちからの感想文集は、私たちの宝物です。

稲作文化はわが国古代からの長い歴史を持っています。それだけに、この事業は、地域の教育に貢献するだけでなく、地域社会への奥深いメッセージを伴っています。

子どもたちの実習は五感を使います。そして自然にも人間と同じような命があり、心があり、暮らしがあることを実感します。そうしたことは子どもたちの心の、のびやかな成長を促す栄養になっていることでしょう。

この取り組みは一見地味ですが、当会を代表する事業となって強く発信を続けているのです。

（文責　阿部和生）

2009（平成21）年6月、ならやまに近い佐保台小学校5年生の体験学習が始まりました。黒米の田植え、稲刈り、脱穀を通じて自然の命と心を学びます。その第1期生の水上さんは沖縄で小学校の教壇に立っています。思い出を寄稿してくれました。

子どもたちへ
未来のバトンを

水上　由賀

この度は、奈良・人と自然の会の二十周年という節目の記念誌に執筆する機会をいただき、心より感謝申し上げます。現在、沖縄県公立小学校にて教員をしています、水上由賀と申します。今年度から二十二年間生まれ育った奈良を離れ、一年生の担任として悪戦苦闘しながらも、子ども達と共に成長し、充実した日々を送っています。

私は佐保台小学校五年生時に、ならやまの地で田植え・稲刈り体験学習を経験させていただいた“一期生”です。そして、昨年度には教育実習生とし再び、稲刈り体験学習に関わらせていただきました。コロナ禍によって教育実習が延期され、急遽決まった稲刈り体験学習でした。始まる当初は不安で胸がいっぱいでしたが、このような縁に恵まれたことをとても光栄に思います。

執筆にあたり、田植え・稲刈り体験学習が私の人生にどのような影響をもたらしたのかを振り返りました。その中で考えたことやこれからどのように次世代へと伝えていきたいかを僭越ながらまとめさせていただきます。

結論から申し上げますと、田植え・稲刈り体験学習は私にとって自然と共生した人生を送りたいと考える原体験になりました。そのようにいえるくらい当時の私にとって新鮮かつ衝撃的な体験でした。卒業アルバムの楽しかった思い出を書く欄には「田植え」と書くくらいでした。

私が生まれ育った奈良は自然に恵まれています。しかし、その自然は時代と共に私たちとの距離ができ始めていたと感じます。ICT 技術の発展によって子ども時代の遊び方も目まぐるしく変化しました。幼少期はよく公園で遊んでいました。しかし、小学生頃から小型ゲーム機が流行したこともあり、部屋の中で遊ぶことが増えました。時には、友達と公園で遊ぶ約束をしたとしても、ベンチに座って通信をして遊んでいたこともありました。目を向ければすぐ近くにある動植物の存在に全く関心をもたず生活していました。そんな私に衝撃を与えたのが田植え・稲刈り体験でした。何よりも驚いたのが田に住む虫たちの存在です。田は米だけでなく、虫たちも住んでいる、共存しているのだと知った時、今まで当たり前に食べてきた米にたくさんの命が宿っていることを学びました。また、小さくも力強く生きている命の全ての源は自然であることを知りました。自然に対する畏敬の気持ちはここから芽生えたと感じます。

私は人一倍繊細で、うたれ弱く、落ち込みやすい性格です。そのせいか今まで生き辛さを感じてきました。五年生当時も息苦しさにもがいていました。そんな私ですが落ち込んだ時、決まって自然を感じるようになりました。なぜなら、自然はどんな私でも無条件に受け入れてくれるからです。また、自然の中で生きる動植物たちの命を感じ、勇気が湧いてくるからです。このように感じ取れるようになったのもあの時の〈田植えと稲刈りの〉原体験があったからだと思います。

私が沖縄県で教員をする決断をした理由は自然とも関係しています。沖縄県は大自然に恵まれ、国内外の多くの人々に愛される魅力的な地域です。しかし、その光がある一方で子どもの相対的貧困率が全国で一番高く、経済格差、学力の低さなど困難な課題という影も抱えた地域でもあります。そのような光と影を知った時、今の私は何ができるのか、何が足りないのか、目の前の子どもに何を伝えることができるのか、そのような想いが拭いきれず、ここ沖縄県で教員になることを決めました。

人も自然の一部です。どれだけ科学や経済、医学や農業が発達しても、その本質は変わりません。私はこの地で子ども達と共に成長したいです。そして、私が救われたように、今生き辛さを抱えた子ども達に少しでも自然と共生すること、大地の恵みとそこに生きる命に目を向け、思いを馳せ、次世代へ未来のバトンを渡せるように尽力していきたいです。

本物に触れる体験を通して

奈良市立佐保台小学校
校長　吉元　祐介

奈良・人と自然の会が、創立20周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。貴会との出会いは、私が本校に赴任した令和元年に遡ります。その時にはすでに、奈良・人と自然の会の皆様には、5年生の稲作体験学習や、放課後子ども教室での植物や昆虫などの観察会、シイタケやサツマイモの収穫など、子どもたちにたくさんの学びの機会を提供していただいており、本校教育に多大な貢献をいただいておりました。

本校は、住環境や自然環境に恵まれた立地でありますが、自然に触れ合うためには、子どもと自然とをつなげる役割が必要になります。その役割を担ってくださっているのが奈良・人と自然の会の皆様の活動やならやまベースキャンプの存在です。

ならやまベースキャンプを訪れ、皆さんの活動の様子を見せていただいたり、貴会の活動理念や思いをお聞きしたりするうち、活動の奥深さを知ることになりました。ならやま里山林の再生や農地の開墾にとどまらず、図録集の編纂や山林の観察・調査をまとめたり、そのことを広くホームページ等を通して発信したりするなど、精力的に社会貢献をされているお姿に頭が下がる思いです。

本校に対しましても、次世代との絆をつなぐべく、献身的に関わりをしていただいております。

今年度も、本校の5年生がベースキャンプ内の水田で紫黒米（さよむらさき）づくりをさせていただきました。この取組は、平成21年度より行われており、5年生にとっては楽しみな学習の一つとなっています。 今回も多くの会員の皆様に集まっていただきご指導をいただきました。時節柄感染症対策や熱中症対策にも積極的に取り組んでいただきました。おかげで子どもたちは安心して、田植え、稲刈り、脱穀等の作業を、一年を通して体験させていただくことができました。田植えや稲刈りから帰ってきた子どもたちは、手足ばかりか着ている服まで泥だらけになりながらも、屈託のない笑顔を見せながら、楽しかった出来事を話してくれました。

昨年度は、収穫した紫黒米を学校給食の食材に混ぜて炊飯し、全校で味わいました。「給食で食べる」ということはこれまでにない初の取組でしたが、関係機関の協力を得て実施することができました。この取組がきっかけとなり、その後、奈良市では、学級園などで子どもたちが育てた食材などを、学校給食に取り入れることが認められるようになり、他校にも広がりを見せています。

また、稲作の体験を「短歌」にしたため、朝日新聞の朝日歌壇に投稿し新聞に掲載されたり、図録集の表紙に作品を取り上げられたりと、貴会とのつながりを通して才能を開花している児童も出てきています。

長年にわたり貴会の皆様のお力をお借りし、本物に触れる体験活動をしていただいていることは、まさに、子どもの心を耕し、そこに種をまくかのような活動であると感じています。そしてその種はゆっくりと心の中ではぐくまれ、豊かな恵みとなる時を迎えるのだと思います。

今後も、次代を担う佐保台っ子のために、豊かな経験や本物に触れる体験の機会を提供していただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

児童ら19人 田植え体験

秋には収穫も

奈良

奈良市佐紀町のならやまベースキャンプで13日、市立佐保台小（同市佐保台3、吉元祐介校長）の5年生19人が田植え体験をした。泥に足をとられながら、約200平方㍍の田んぼに苗を植えた。

「奈良・人と自然の会」が主催し、今年で12回目。この日は古代米の一種、ムラサキクロマイの苗約1100株を植えた。子供たちは赤いたすきをかけ、恐る恐る田んぼに入った。最初は慣れない泥に「わー」「きゃー」と悲鳴をあげたが、次第に笑顔になって取り組んでいた。

参加した中村義幸さんは「今は機械があるから楽だけれど、昔の人は努力していたと感じた」と話した。順調に行けば、秋には約60㌔の米が収穫できるという。子供たちは収穫体験もする予定。

（この記事は記者の塩路佳子と、毎日新聞奈良支局で職場体験学習中の奈良市立平城中2年、細川達矢、前田康成、橘遼、中津洋介が取材・執筆しました）

田植えをする子供たち＝奈良市で

▲毎日新聞・奈良版　2019.6.14

昔は大変やったんやな

奈良市の平城宮跡北東にある里山の保全に取り組む市民団体「奈良・人と自然の会」が13日、市立佐保台小学校の5年生約20人を里山に招き、田植え体験をおこなった。荒れ地を耕して、山水を引いた田んぼ約220平方㍍に約1千株の稲を植えた。

同会は11年前から佐保台小学校に農業体験の場を提供している。この日、初めて田植えをする児童も多く、田んぼに素足を入れた際には泥の触感に叫び声をあげ、カエルや虫を見つけて興奮した様子だった。

約30分、汗を流した後、石橋孝太郎君(10)は「昔はみんなこうしてたんやろ。大変やったんやな」と感慨深げにつぶやいていた。秋に収穫と脱穀をして、児童らで米を炊いて食べるという。

会長の鈴木末一さん(77)は「取り戻した美しい里山の風景を子供たちに引き継ぎたい」と話していた。

（福岡龍一郎）

▲朝日新聞・奈良版　2019.6.14

▲横一線で　2011.6.3

▲TV 取材　2013.6.6

▲鎌の使い方手ほどき　2019.10.10

▲コンバインで脱穀　2020.10.29

おいしく育ってね

児童26人 田植え体験で笑顔

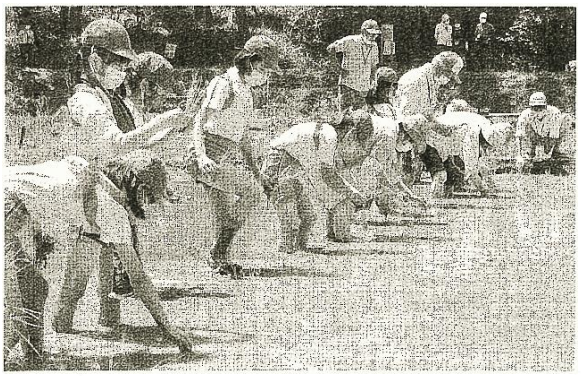
佐保台小の５年生

奈良市佐保台３丁目の市立佐保台小学校（吉元祐介校長）の５年生26人が10日、同市佐紀町の「ならやま里山林」で田植えを体験した。

社会科の総合学習の一環。ならやま里山林は自然保護に取り組む「奈良・人と自然の会」（千載輝重会長）が県の委託を受けて平成19年から整備、荒れた田畑をよみがえらせた。同21年以降は毎年、同校児童の田植えや稲刈り体験を受け入れている。

児童のほとんどが田植え初体験で、水の張られた水田に裸足で入ると、同会のメンバーのアドバイスを受けながら、一列ずつ苗を植えていった。泥に足を取られて尻もちをつく児童も。苗は古代米の「さよむらさき」で、千載会長は「稲刈りや試食会を楽しみにしながら植えてください」とあいさつ。

田植えを終えた小原来宇さん（10）は「最初は植えるのが難しかった。昔の人がこの時期に毎日田植えをしていたのはすごいと思う」と話した。



一列に並んで田植えに挑戦する児童＝10日、奈良市佐紀町のならやま里山林

▲奈良新聞　2021.6.12

「食べるの楽しみ」

佐保台小5年生 田植え体験

奈良

奈良市立佐保台小（同市佐保台3）の5年生23人が10日、学校近くの水田で古代米の一種「サヨムラサキ」の田植えを体験した。青空の下、裸足で水田に入った児童らは、市民団体「奈良・人と自然の会」の会員らの指導を受けながら、次々と苗を植えていった。10月には収穫作業も行う。

神戸すず花さん(10)は「水が冷たく足もぬるっとして最初は気になったが、初めての体験で楽しかった」と充実した表情を見せた。祖母と稲刈りをしたことがあるという浅井奏瑛(そうえい)さん(10)は「収穫して食べるのが楽しみ」と笑顔で話していた。【田中なつみ】

田植えを体験する児童ら＝奈良市で

▲毎日新聞・奈良版　2021.6.13

朝日歌壇

高野公彦選
永田和宏選
馬場あき子選
佐佐木幸綱選

給食で出るのが楽しみ古代米「さよむらさき」の稲刈りをした　（奈良市）山添　葵

多くの短歌愛好者が投稿する朝日新聞全国版の「朝日歌壇」（2021年11月28日付）に選ばれた佐保台小五年生の短歌です。

4人の選者が計40人の短歌を選びました。そのなかで高野公彦、馬場あき子、佐佐木幸綱の3氏に推薦されたのは、山添 葵さんの作品だけでした。

自然豊かな日本の原風景を取り戻すため,奈良・人と自然の会は「歴史的風土と自然環境に恵まれた里山を次世代へ」を理念にしています。この短歌が実証してくれたと言っても過言ではないでしょう。

思　い　を　語　り　合　う

実施日：2021 年 11 月 16 日
場所　：はぐくみセンター
参加者：副会長５名
（太田和則、小島武雄、辻本信一、
冨井忠雄、平田範光）
司会　：千載輝重（文責）

この５年間を振り返る

【司会】

本日はお集まりいただきありがとうございます。20 周年の節目に皆様のお話を聞くことが出来る事を、経験の浅い私としてはとても楽しみにしています。よろしくお願いします。

15 周年記念誌では鈴木前会長の司会で歴代の３人の会長にお集まりいただいて、2001 年 9 月の創立から 15 年間の歴史である創世記（2001-2016）、開拓期（2007－2011）、成長期(2012-2016)について苦難の歴史と将来に向けての期待など語っていただきました。今回の座談会では、里山の原風景が再現されて様ざまな活動が根付き、ユートピアに近づいた成熟期である最近の 5 年間（2017―2021）を振り返り、さらにこれからの５年間をどのように過ごすかをメインテーマにお話しいただきたいと思います。

千載

まず、15 周年から最近までの５年間はそれまでと比べてどのような時代で、皆さんはどのような思い出をお持ちでしょうか？

【辻本】

2012 年東北大震災の翌年に入会しました。奈良の田舎のおっちゃん、おばちゃんの集まりと気楽に入ったのですがなんとびっくり、総会では皆さんびしっとスーツ姿でこれはたいした組織だ、なめたらあかんと身がひきしまりました。

【司会】

私も同じ感覚で入会したのですが、ことのほかしっかりした組織でした。まさか私がそんな立派な会の会長になるなんて偉いこっちゃ！です。

【辻本】

2015 年に事務局長を拝命し、執行部としてその後の会の成長を体感することができました。県からの委託事業にとどまらず、我々の自主性を発揮して積極的な取り組みのもとで選択的に実現していく「ユートピア構想」が提唱されたのは 2017 年でした。その後、あまりにも価値観が多様化していく中で、方向を見失わないように、

辻本

ときに第１ミッションである「里山における景観保全整備」という原点復帰を意識してきました。

【司会】

冨井さんはいかがですか。

【冨井】

私が入った 2011 年のころはまだ活動域もせまく、畑も水田もちょっとで多くて 30 人くらいの活動でした。何をするかはその日に決めました。最初の１年は竹を切ってばかりいました。

2018 年にならやま委員長を拝命したのですが、組織が膨張していく中で、グループ活動が中心になって全体の意思疎通が希薄になっていました。そこで、ならやま委員会の充実に注力し、毎月の各グループの活動を共有するととも

に、主要な課題について議論を深めるように努めてきました。

また、５年前に例会担当を受け継ぎました。それまで自然教室や歴史文化クラブなどにお願いしていた例会活動を、大和の自然と文化を中心にして親睦も含めた独立した活動にしたことで、会員交流の活性化につながったと思っています。

富井

【辻本】そうでしたね。昔というか 10 年ほど前は里山に来てから今日は何をするか決めてよかったんです。毎週里山に来るのがしんどいということで例会の方が参加者が多かったこともよくありました。

【司会】

平田さんはいかがでしたか。

【平田】

私が入会したのは 2010 年でした。このころはまだグループも無くて、みんなが「なたのこ」と剪定ばさみを持って山に入ってました。

平田

最近の５年間については、苦労したナラ枯れへの対応がようやくこの間に収まったことから、被害木の伐倒や林内整備、観察路の整備などに没頭した時期でした。その後、本来の里山再生に向かって活動を開始しましたが、コロナ禍のために参加者が減少し、思うに任せない状況が続いています。

【司会】

グループ制はいつごろからはじまったんですか。

【辻本】

私が幹事になったのは 2013 年ですから 7～8 年前からだと思います。小島さんと一緒にグループ別にマグネット名札を貼るようにしました。たしか 2016 年ころに鈴木前会長のアイデアで「協働活動」が始まったと思います。

【司会】

太田さんはどうでしたか

【太田】

私は九州長崎の島原の出身で百歳のオヤジを見送って、何をしようかなと考えていた時にある方からこの会を紹介されました。元々竹や木を切るのが大好きで、これは自分に向いてると思いました。いつの間にかこの中では最年長になりました。

景観グループは、管理地域の拡大もあり、4～5 年前は最盛期で、各グループからも頼りにされる存在でした。その後、コロナ禍をはじめ、さまざまな理由から要員は激減し、高齢化と合わせて「シンドイグループ」になっています。

太田

自走式草刈機などの機械化によってマンパワーはある程度補えてはいますが、的を絞った整備活動に切り替えつつあります。

【司会】

小島さんはどうでしたか。

【小島】

私は辻本さんと同期です。実習で来て大汗かいて気に入りました。木を切ったり、羽尻さんと池の管理をしたり、とにかく自然の中で汗をかくのが楽しかったです。パトロープグループに誘われてから、観察路整備、景観のあり方を仲間と考えながら進めるように変わりました。

幹事になってからはさらに問題意識を持つようになったと思います。観察路は既存の４コースにＡ地区も加わり、丸太階段は 40 か所を超えています。2019 年には守口さんがグループの生い立ちをまとめてくれ、いい振り返りの機会にもなりました。

2017 年にはメンテナンス班が新設され、さまざまなインフラ整備に取り組みましたが、中でも、緑陰広場横の水路移設、エントランスのメイン階段設置は大工事でした。その延長でしょうか、展望台や学びの森の整備も担当させていただきました。ただ、この 2 年間のコロナ禍による活動の停滞は、せっかく整備したならやまをあっという間に荒れた状態に戻してしまっており、観察路の縮小も考えざるを得ない状況になっています。

小島

仲間の様々な想いから

【司会】

皆さんは入会後数年して幹事となられ、それぞれの役割を担うことで、活動に対する意識も変化し、さまざまな課題に取り組んでこられたことがよくわかります。今年は 20 周年の節目として会員の気持ちをみんなが共有するためにアンケートを実施しました。特に、ならやまでの活動ではグループのコミュニケーションが活性化されて、現状の課題と今後に向けての話につながればと思っています。何か話し合いから気づかれたことなど、いかがでしょうか？

【平田】

里山グループでは、かなり以前から里山林の今後について話し合いを繰り返しており、その方向性についてはほぼまとまっています。けれども、さきほども言いましたが、要員不足のために苦慮しています。メンバーは多いのですが出席率が低く古参が頑張っている状況です。コロナの影響も大きかったです。最近は入会後すぐに各グループに分散されてしまい、どうしても負担の大きい活動が避けられてしまう傾向にあります。ならやまプロジェクトの目的を今一度再確認して、活動の優先順位を考える必要があると思います。

【太田】

景観グループは、草刈りを中心とする景観整備、里山を美化する花、水生生物を保護し水辺の景観を整備するビオの三つの活動をしていますが、いずれもこの数年で要員が激減し、活動の縮小を考えざるを得ない状況になっています。

多いときはメンバーが 30 人ほどいました。それが最近は活動する人数が 10 人ほどです。活動する喜びよりも苦痛や不満が先になります。以前は筋力バリバリの人も高齢化すると作業が辛くなります。

これまで、なぜその活動をするのかについて、真剣に考えてこなかったように思います。

草刈りは里山管理の原点であり、そこに生息する生き物を守るためにもなくてはならない活動です。花は四季を通じて里山を彩り、そこを訪れる人に力を与えてくれます。ビオは水生生物はもちろん、里山の水系を守らなければなりません。それぞれ里山管理になくてはならない活動だと再認識し、そのためにより効率的に活動する工夫が大切だとの認識が高まっています。

【司会】

話がそれますが、草刈り機やチェーンソーなどの機具は操作を間違うと大きな事故につながりますがこれについてはどうでしょうか。

【太田】

最近も草刈り機の事故が報道されました。操作する人よりもそばにいる人にけがをさせることが多いのです。特に高齢者は身体が不安定で

すし、蛇などを見つけるとあわてて機械を大きく動かして横にいる人を切ってしまいます。5m以内には絶対近づかないことが大事です。

【司会】

ありがとうございます。次に小島さんお願いします。

【小島】

現在､観察路はＡ地区を含めて４コースあり、その長さは５ｋｍを超えます。多くは自然林の中にあり、倒木や落枝などの危険もあって、パトロール以外であまり立ち入ることはありません。でも、そこには希少種植物が多数確認されており、皆が何とかこれを守りたいと思っています。また、四季折々の観察会をもっとＰＲして美しい自然を観察する楽しみを広げる工夫も必要だとの意見も多いです。

しかしながら、高齢化が進みマンパワーも減少傾向にあり、観察路の整備が行き届かなくなって歩けないところも増えてきています。やみくもにできあがった現状を維持するのではなく、目的に沿った観察路に絞って縮小も考えようとしています。現在 11 名ですが男性が少なくグループの人員配置を検討していただきたいです。

一方、ならやまは 15 年を経過してあちらこちらに補修を必要とするところがあります。メンテナンス班の負担が大きく、あまり余分なものは作らず、必要なインフラに絞るとともに、体制を強化する必要を感じます。

【司会】

冨井さんはいかがでしょうか。

【冨井】

各グループとも活動が広がった反面、要員は減少気味だったのが、コロナ禍で参加者が減り活動も制約を受けたために、一気に問題が顕在化したようです。そして、それぞれが自分たちのグループの活動に精一杯であるために、会員の交流も分断されて全体としての取り組みに対する意識が希薄になっています。グループ内で話し合う機会を増やして今後の事について相談し、人手が足りなければ協働活動をするべきです。内容によっては参加者全員が協働することも必要です。

ならやまプロジェクト以外の月例研修会、自然教室、イベント、クラブ活動などが、コロナ禍で思うようにできなかったことも会員の交流が少なくなった原因でもあり、何とかこれらの活動を復活させなければなりません。

【司会】

各グループとも人出不足で全体が見えなくなっているようです。パワーの足らないところは協働活動を増やしたり、思い切って活動日を増やすというような検討も必要ですが、その話は別の機会に相談しましょう。

【辻本】

これからは今まで以上に会の資源である「人・物・金」の適正な配分が重要になると考えます。これまでは人材、資金ともある程度余裕があり、それぞれが違った考え方でさまざまな価値観のもとに活動してもあまり問題にならなかったのだと思います。けれども、資源に限りがあり､活動の制約も考えざるを得ない中で、「自由には責任を、権利には義務を」の考え方から、会員全員が労苦を分かち合う精神を持っていただくことが肝要です。すべての想いに迎合することなく、会としての基本的な考え方を再確認しなければならない時期にあると思います。しんどいことはしたくないという気持ちではこれだけの人数がいても人手不足を感じます。「適材配置」がうまくいかず偏っているように思います。

ならやまプロジェクトは第一に「里山における景観保全整備活動」です。これに沿った適切な資源配分が必要です。グループによる活動より全体活動を優先する意識の醸成がなされるべきであり、そのためにも協働活動の目的も見直す必要があります。

会の現状

【司会】

会員アンケートの結果では、会の活動には総じて満足度が高く、執行部や世話役に対する感謝の言葉もありましたが、不満とする原因は負荷の増大と意思疎通・風通しでした。

参加目的の多くが「仲間との交流」「自然に親しむ」「心身の健康」といった「楽しさ」を基点とするものでした。また、負荷が大きくとも目的・目標を共有できれば「達成感」が楽しさにつながります。活力の源泉は「楽しさ」であり、当然のことですが、これが負担の大きさを上回っていないと会の力は減退するでしょう。

これまで、全体的な見方から５年間を振り返り、現状についてお話をお聞きしてきましたが、もう少し具体的な切り口からご意見をお聞きします。切り口としては、会員数・会員像、組織運営、活動頻度・活動日、協働活動、イベント、自然文化活動、地域貢献、広報、資金面　などが考えられます。

【平田】

会員数・会員像という切り口にあっているかどうかはわかりませんが、会員にはならやまプロジェクトとは何で、どの活動が優先されるのかについて、きちんと認識していただく必要があるように思います。好きな活動以外にも参加することの意味を理解していただくためにも。

活動頻度や活動日は現状のままでいいと思います。活動日数を増やしても結局だらだらやることになりかねない、活動方法を工夫すべき、との意見があります。また、イベントのスタッフはイベント当日だけでなくもっと準備段階から活動すべきです。特定の人に負担がかかりすぎています。協働活動は「手助け」でなく、皆が取り組む全体活動であることをきちんと徹底する必要を感じます。

【太田】

組織が大きくなったことから、グループでの活動に依存することはやむを得ないですが、幹事の役割分担が不明確で、幹事の数ほど役割がきちんと果たされていないように思います。また、ほとんどの会員が運営に積極的に参加していないため、幹事や執行部で何が議論されているのか見えていないようです。

活動日は年間 50 日ほどですが、きちんと準備をすることも入れるとかなり不足しています。もっと活動日を増やすことも含めて、現役が参加できる土日も考えてもいいですが、なかなか調整・運営が難しそうです。

イベント、広報、資金面など、あまり無理のないよう、できる範囲で考えなければとの意見があります。

【小島】

「明るく　楽しく　無理をせず」の原点に返って、規模の縮小も視野に活動を見直し、季節の自然観察や貴重な植物の保護に注力したいとの意見があります。助成金についても里山原風景保全に絞って活用し、プロジェクトの範囲をあまり広げないようにすべきでしょう。

【冨井】

グループ人員配置の見直しも必要ですが、リーダー、幹事の世代交代も促進すべきです。また、目的を再確認したうえで、各グループがわかりやすい活動計画を作成してみんなで共有し、より計画的な運営につながればと思います。全体としても、拡大してきた活動の縮小も考えなければならないかもしれません。

会員の相互理解を深めるためにも、自然文化活動やイベントの活性化を図るべきです。「仲間との交流」による「楽しみ」の増大につながり、会員の参加意欲も高まることも期待できます。

【辻本】

組織が肥大化して、執行部でも各グループの活動が理解・把握できなくなっているように思います。ややもすると目的から外れるような活

動もあり、私たちももっと各現場に足を運んで確認するよう努めなければなりません。目的に照らして優先的に人員配置を考える必要性を感じます。もともとはグループへの所属という考え方は無く、当日に参加する活動を選択する形でした。全体として優先すべき活動に参加することもやりやすかったと思います。協働活動の意義を再確認し、きちんとした目的意識をもって計画すべきです。

組織を運営する役員や会議体は現在の形でいいと思いますが、幹事会での議論が上滑りになっていることもあることは反省すべきです。みんながしっかりと考え、意見の言える風通しのいい運営を目指すとともに、誰でもが輪番で役員として役割を果たせるような組織づくりができないかと思います。

活動日については、高齢化と会員数減少の傾向が見える中では、若い人たちの参加できる活動日を考えるべき時期が来ています。

新しい人たちを迎える入り口としても、地域貢献の一環としてのイベントや自然文化活動はますます活性化すべきだし、また、地域の自治会や学校ボランティア団体とも交流を深めていかなければと思います。

資金面では、不安定な助成金に依存する体質から、自立するための思い切った方策も考えておく必要があります。

【司会】

20 年をかけて着実に成果を上げてきた当会の歩みは、さまざまな機関から高い評価を受けています。秋の褒章において、緑綬褒章の栄誉をいただいたことは、20 周年を飾るにふさわしい出来事でした。これまでの諸先輩のご苦労の賜物だと改めて感謝したいと思います。

一方、今日の座談会を通じて、豊かさの中で自由な活動が広がった結果、本来の方向性が見えづらくなっており、また、高齢化と人材の減少、安定財源の確保など、大きな課題に直面していることを改めて共有できました。この２年間のコロナ禍は、思わぬ活動の停滞、参加者の減少をもたらし、こうした課題を実態以上に大きな問題として私たちに突き付けてきているようにも感じます。

力を合わせて何とか課題を克服し、受け継いだ素晴らしい成果を次世代につなぐことができるように頑張りましょう。

本日はありがとうございました。

会　の　こ　れ　か　ら

ならやまプロジェクト

2007 年に奈良県から管理を委託されてスタートした「ならやま里山林景観整備保全事業（通称ならやまプロジェクト）」は 15 周年を迎え、途中には 2012～2017 年にナラ枯れという大きな障害もありましたが、当初 7 ヘクタールだった管理区域はその後 16 ヘクタールに拡がり、山林、竹林、果樹園、農園など、まさに里山が蘇っています。活動も大きく広がって、今では、里山グループ、エコファームグループ、景観グループ、パトロールグループ、果樹グループの 5 つのグループがそれぞれの特色を生かした活動を行っています。また、復活したならやまは次世代を担う子供たちの生きた自然環境教育の場としても活用されています。

ならやまプロジェクトに参加する皆さんがそれぞれの楽しみや夢を実現すべく活動してきた結果が5つのグループの活動に集約されています。私たちのならやまはこの 15 年の間にたくさんの夢を実現してきました。それでもまだまだ夢は尽きませんし、こうありたいと望むことはたくさんあります。けれでも、人、物、場所、金という資源に限界もあります。その限界を踏まえながら、新たな 10 年、20 年へとつないでいかなければなりません。

当面考えられるいくつかの課題もあります。まず、ナラ枯れで荒れた里山林は一応整備されましたが、あるべき里山林への再生に向けて、適切な間伐による萌芽再生の促進と植樹を進めていかなければなりません。健全な里山林の実現のためには計画的な維持管理が必要不可欠であり、景観整備保全のあり方を再確認する必要があります。その中で一部に残るアカマツ林の再生にも取り組むことになっています。

東池から田畑を通り西池まで里地を通る水路の整備です。近畿大学と共同で保護育成に取り組んでいるニッポンバラタナゴをはじめとする水生生物、水生昆虫（ホタルなど）が生息する環境の実現のためには、里山全体の水系をその保護育成に適した環境に改善していく必要があります。

次に、里山活動に不可欠な最低限の農業をより有意義なものとするための、有機栽培（無農薬）とならやま産（大和野菜含む）の特徴ある作物の栽培です。加えて実り豊かな里山を目指して、果樹園もさらに充実していきたいと考えています。そこに立ちはだかる鹿害は大きな課題として効果的な対策を講じていく必要があります。 そして大きく広がったならやま全体の景観をいかにして保全していくか、雑草対策、清掃美化の計画的な取り組みは不可欠です。

ならやまプロジェクトは里山再生だけでなく、その豊かな自然を子供たちに伝え、地域と一体となった活動を目指しています。

昨年、ならやま全体を見渡す四季の丘が整備され、学びの森には一昨年からの学生たちとのコラボにはじまった機関車「ならやま大地号」と「ようこそモンキー」が迎える広場が、そしてそのエントランスには里山林に彩りを添えるモミジ広場が整備されました。より魅力を増したならやまに子供たちを受け入れ、自然の大切さを学ぶきっかけとするとともに、地域の宝として誰もが親しみを持って訪れてくれるような里山にしていきたいと思います。

ならやまプロジェクトは「仲間への尊敬と感謝」をパワーの源として成り立っています。今後、ならやまでの活動はどうあるべきか、5 年後にはどのようになっていればいいかなどについて、各グループで忌憚のない意見交換をしていただき、全体として取りまとめていくことができればと思います。

知恵と経験を活かし、「明るく、楽しく、無理をせず、あなたも私も、力をあわせて」ならやまプロジェクトが生き生きとした活動であるよう願っています。

（文責　冨井忠雄）

里山グループ

ならやまの里山林はコナラのカシナガ被害によるナラ枯れに始まり、コロナ禍による活動自粛のため、里山林内の整備作業が追い付いていません。里山林の整備の遅れを取り戻すとともに、今後は「美しい里山造り」を目指して活動を推進します。

「美しい里山作り」で目指すのは「クヌギ・コナラ等の落葉広葉樹を中心とし、下層には常緑樹等も存在する里山林」です。このような里山林を実現するため、以下の作業に取り組みます。

・「美しい景観を持つ里山」の整備
・強間伐による世代更新作業

また、これらの活動を支えるため、森林資源の活用（薪や特用林産物の生産）をはかり、安全作業と事故防止は最優先に作業を行い、あわせて人材の育成を推進します。

1. 美しい景観の里山林の整備

ナラ枯れ対応・コロナ禍などで、かなり荒れた30 区画について順次整備します。具体的には、ナラ枯れ・掛かり木・倒木の伐採、ソヨゴ等の大きな常緑広葉樹の伐採、処理木等の整理整頓などを行い、美しい景観の里山林を目指します。

2. 世代更新の促進

美しい里山林を更新・再生するには、強間伐による萌芽促進・植樹する方法や部分皆伐して、萌芽・植樹で更新する方法などが考えられます。試験的に行った南・北部分皆伐区では萌芽がうまく成長し、経団連部分皆伐地区は植樹苗が順調に生育しています。

他方、西側通路周辺のギャップ地に数年前に植樹したコナラは日照が十分ではなく、根付いてはいますが未だ幼樹に等しいものが多い状況です。

これらの結果を踏まえ「部分皆伐が更新・再生には有効な手段である」との考え方を中心として、適切な管理方法について確認していきます。

3. 薪および特用林産物の生産

・薪生産について

ストーブ用薪の需要は継続的にありますが、これまでの材料であるコナラやクヌギ等が不足することが考えられるため、ソヨゴやクロバイ等、小高木の雑木も薪材として有効利用することを検討します。

・シイタケの栽培

榾木の組み立ての再整備を行うとともに、伐採するコナラの太さ等にも十分留意し、対象とする樹種の多様化も検討します。

・植樹と育苗

実生・萌芽による再生産だけでなく植樹も重要な手段であるのでドングリを拾っての育苗も進めます。

薪割り（薪棚前にて）

4. 人を育てる

里山の保全活動を行うためには継続的な人材育成が不可欠です。専門的な技能者に加えて里山の管理（生態・機能・活用）に基礎的な素養を持つ人材の育成に努めます。

5. その他諸課題

安全作業と事故防止

・特に動力機器などについて、適切な使用方法と十分な技術習得に努めます。
・危険予知能力を養成する安全教育の充実

人材の充足

・活動内容の多様化、作業量の増加に対して、高齢化を含めてマンパワーが不足しており、広報・導入活動による増員とその人材育成が急がれます。

（文責　平田範光）

エコファームグループ

平成21年（2009年）に「有機農業の実践」を基本とする農園グループ（後にエコファームに改称）が発足しました。現在圃場面積は2,200㎡を超え、メンバーは31名になっています。平均年齢は会の平均年齢 75 歳を超えていると思われます。

●グループメンバーの構成（12月現在）

●男性　　20名

●女性　　11名

●参加率　　平均77.7%

（※）コロナ禍で令和3年9～12月の実績。

高齢化で農園作業が難しくなっている状況下、グループメンバーのエコ活動に対する意識調査を目的にアンケートを実施しました。

アンケートのポイントを要約すると

◆エコグループに参加した理由

大半の方が、「畑仕事を楽しみたい」、「健康の維持に役立てたい」、「野菜作りを学びたい」と野菜の栽培を楽しみ、ならやまの自然環境の中で健康の維持、増進に役立てたいと思っている。

◆栽培している野菜につて

多くの方が「現在作っている野菜でいい」と思っているが、「奈良の伝統野菜の栽培」や「魅力的な野菜があれば取り入れては？」との意見もある。

◆耕作地の広さについて

「現状の広さでいい」とする方が多いが、「高齢化する中では、“広すぎる”、“今後縮小も必要”」と思っている人もいて、高齢化するメンバーの共通する対応テーマと言える。

◆自主活動について

「繁忙期の自主活動には出来るだけ協力する」とする方も多いが、各自のライフプランから「定例活動で精一杯」「できれば無い方がいい」「遠距離からの参加はしにくい」 とそれぞれにも事情がある。

◆農園活動以外の活動について

メンバーの親睦を図る為に「年に1～2回の昼食会・研修会やハイキングなど」を行う。

◆どんなエコにしたい？

「憩いの場」、「健康づくりの場」、「仲間との親睦の場」、「野菜作りを学ぶ場」と、健康で、楽しいグループ活動を望んでいる。

◆高齢化する中でエコ活動にどう対処するか？

「機械化できるところは機械化をする」、「規模を縮小する」、「他グループと協働する」、「手間の少ない野菜を栽培する」、「無理をせずに活動する」などの意見が多い。

◆その他の意見として

「野菜作りの学習会を持ってほしい」、「次世代に繋げる活動を増やす」、「水田は里山のシンボル（会の財産）であり大事に維持したい」、「北川先生（近大）の興福寺での取り組みはエコファームにも参考になる」などがある。

以上のことから、今後の活動についてはメンバーの多様な意向を反映すべく、次のことに留意しながら進めていきたい。

■高齢化を認識し「無理をしない」をモットーに健康で、楽しく野菜作りを行う。

■有機農業を実践し環境にやさしい（ビオトープと共存する）エコファーム活動に努める。

■ビオ班と連携して池に沈殿した泥を取り入れ、天然ミネラルの有効活用を目指した試験的な菜園区画を設ける。

■栽培計画の作成、生育の記録、収穫の記録（ほのぼの寄金など）を分担した効率的な菜園づくり。

持続的なグループ活動は次世代に繋ぐ最重要事項です。今後適時、計画的に研修会・懇談会を持ち、「楽しいエコファーム」をモットーにメンバーの求める活動の具現化に努めていく。

（文責　三瀬英信）

景観グループ

景観グループは、草刈りを中心とする景観整備、里山を彩る花班、水生生物を保護し水辺の環境を整備するビオトープ班の三つの活動をしています。いずれもこの数年で要員が激減し、マンパワーの不足を痛感しており、活動範囲の選択を考えざるを得ない状況になっています。

・景観整備の草刈りと整備は、景観とそこに生息する生き物を守るためにも大変重要な活動です。草刈り、竹林整備、清掃、危険物除去、里地の障害物整理、筍掘り、協働作業その他を効率良く進めます。

・花班は四季を通じて里山を彩り、訪れる人に憩いを与えてくれます。今後当面は、部分的に他グループに管理してもらい、自転車道沿いを効率的に管理し、一部は花木のような手間のかからないものに植え替えながら取組みます。この班は活動メンバーが極端に減少し困っています。コツコツと地味な作業ですが開花の喜びは格別です！

・ビオ班の目標は、「ならやま」にタナゴの棲む池、ホタルなどの水性昆虫が群れる自然を作り出すことです。ビオの活動の主体はインフラ（水環境）の整備と植物の保護であり、環境の保全です。希少生物ニッポンバラタナゴの保全的育種活動を近畿大学と共同研究を進め、自然の状態で種の継続に必要な田貝の育種がうまくいきつつあります。

西池の環境を改善し、ビオエリア全体で田貝の繁殖が可能な環境を構築することを目指します。水路整備を進め、安定的に水を確保できる環境を作ります。腐葉土の栄養を水に溶け込ませる仕組みを作るなどの課題も多く、最小人員の積極的な活動に支えられています。

当面、景観グループでは“ゆとり”を感じる間もないですが、それぞれ里山での重要な活動だと再認識し、効率的な活動の工夫と新たな人材の確保を模索しなければなりません。

マンパワー不足に対する方策としては、一つ目は新規機具導入による機械化の推進（すでに自走式草刈り機２台など導入済）、もう一つは道具・機器類を安全で扱いやすく軽いものにすることで、男女を問わず、研修訓練により労力の確保を図ります。

定年70歳時代。このまま退職者を受け入れても、期待する要員（パワー）は確保できないでしょう。どのグループでもパワー不足に悩んでいますが、仲間同士何とか「力を合わせ」れば乗り切っていけるものと信じています。

“ゆとり”あるグループを目指したい。

（文責　太田和則）

パトロールグループ

～自然観察路における植物保護（レッドリスト）について研修～

2021年11月、リニューアルされた学びの森の広場にて、10名参加で勉強会を行いました。パトロール G での植物保護活動は、会にとって重要な活動です。

ならやま自然林は、観察路のみを整備し、できるだけ手を加えない様にしています。おかげで数多くの植物が生息しています。ただ、数年前のナラ枯れ被害で、枯死木や倒木が増えて、木漏れ日の林内にこれまでに無かった強い日差しが入り込む様になりました。植物の生息環境が大きく変わってしまったのです。

それにより、今まで見られた植物がなくなったりして、大きく数を減らしています。今回、数年間の植物データを見比べて現状を確認し、何らかの対策を取れないか？ 皆で話し合いました。

□　減少した原因は、①特に日照を好まない植物が消滅。②知らない内に草刈りで切られてしまう。③特定種に入り込む害虫などの被害。④生息していた範囲がどこか不明となること、などがあります。

　これらへの対策は、いずれもなかなか難しい。自然環境の変化には抵抗できません。草刈りミスに対しては、目印の黄色いリボンが効果的ですが、盗掘の目印にもなり問題があります（盗掘の恐れがないと思われる植物には、保護柵の設置を行いました）。また虫害に対しては、今のところ対応が出来ていません。

今回の研修で確認できた事。（これからについて）

□　植物自然環境の保持はとても重要で、里山整備には不可欠である。

□　自然観察路は、奈良・人と自然の会として大切にすべき貴重な存在である。

□　他地域から持ち込まれた植物は、自生種とはいえないことを再確認する（活動当初に、他地域からたくさん持ち込まれて長年の間に根付いてしまっている）。

□　ならやま自然の森には、数多くの植物が生息している。これを知ってもらう為、会員向けの季節観察会を定期的に行い、興味を持ってもらう様に働きかける。

□　植物の掲示板を設置して、季節ごとの開花植物の状況を見て、興味を持ってもらう様にする。

□　大切にされている植物等（レッドリスト以外）。ショウジョウバカマ 、ツルリンドウ、クロモジ、アオキの雌木、ツリガネニンジン、オドリコソウ、ワレモコウ、ヌマトラノオ、ミツマタ、ホタルブクロ、カスミザクラ 、ソシンロウバイ等

□　ならやまの植物保護のおかげで、鳥類も生息している。オオルリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ホトトギス、オオタカ等

キノコ勉強会もあわせて行い、次のことを話し合った。

□　見た目の見分け方、8項目（生息場所、固さ、柄、カサの色、ぬめり、模様、カサの裏側のヒダ猪口、軸模様）、更には味、匂い、DNA、試薬等。食べられるキノコは？ 経験豊富な方ほど、断定は避ける。

□　キノコの宝庫、ならやまの現状について。

木漏れ日を受けて、学びの森での研修会

池の横の堆肥の上に、ツマミタケ

（文責　小島武雄）

果 樹 グ ル ー プ

～ あり方と、現状、その求めるもの ～

近頃サスティナブルソサイティという語が、我々が目指すべき社会としてよく語られています。人々が暮らしの豊かさを求めた結果、地球環境は、悪化の一途を辿り、地球温暖化、森林破壊、酸性雨等々の問題が起こってきています。

そんな中、我々のならやまの活動は、正にその解決の一助を担っています。人々の生活に密着している里山を整備し、木を植え、森を作り守り、水辺には生物が安心して暮らし、有機無農薬で地球にも身体にも優しい作物を作り、花を咲かせ、実を実らせ、その豊かな自然の恩恵を受ける。正に今、社会が求めるユートピアがここにあると信じます。林業農業を一緒に行ってお互いの利益を最大限に活かし合うというアグロフォレストリーの考えとも一致するものです。

我々の里山では、枯死木を整理、一つ一つ手を入れて整備し、実りをもたらす木を植え続けています。柿、柚子、無花果、サクランボ、ザクロ、スダチ、ミカン、八朔、甘夏、スモモ、ブルーベリー、グミ、栗、レモン、梅、橘の木が植えられています。

実りをもたらすまでは、時間がかかり、まだ一部しか会員の方に食べていただていませんが、果樹グループの、目指すところは、一年中、豊かな木々に花の咲く森、果実がたわわに実っている森を育てることです。

近々には、キーウィ、金柑を植え、木の足元にミョウガを植え、そしてその次には、美しく咲く花の蜜を集めてもらう蜜蜂の飼育に再挑戦したいと考えています。また、やっと実り出した栗の実は皆さんに好評でしたので、限られたメンバーで管理のできる範囲で栗の木をもっと増やしたいと考えています。

もう一つ果樹グループが目指していることは、加工食品を作って食べていただくことです。梅ジャムを作って美味しかったと言っていただき大変な励みになりました。無花果、キーウィ、ブルーベリー、柚子、グミ、柿、梅、等々のジャムを作って、一年中皆さんに食べていただきたいです。果実や、加工品を会員の皆さんに提供する（収穫した果物を冷凍し、必要な時にジャムを作ります）ことで、ほのぼの寄金にも貢献したいと考えています。

グループの話し合いで出た話題を列記しておきます。

・備えたい備品について

三角巾、ポイズンリムーバー、AED

・協働活動、イベントへの参加について

これからも積極的に、参加していきたい。

・グループ間の、交流について

他グループで相談され、手が足りない等、お助け要請があれば可能な限り協力したい。

発足１年の果樹グループですが、話し合いをもとに中期計画と短期計画を作成し、できるだけ早い段階から収穫の喜びを分かち合える組み立てを行って、「明るく・楽しく・無理をせず」の理念で、個々の体力に応じた安全に労働できる環境を、グループ全員で、力を合わせて作り上げていきます。

「古都奈良にふさわしい日本の原風景を再生しようと活動を続ける」を合言葉に、だれが見ても美しい、実りの森を目指したいと思います。

（文責　有元康人）

月　例　研　修　会

５ 年前までは、毎月 １ 回、歴文、自然観察、野鳥観察、県外での研修会などを行っていましたが、４年前からは、年間６回で偶数月の実施としています。

この５年間を振り返ると、

2017 年は、室生古道（室生大野～室生寺）、土佐街道、高取城跡、夏季研修会は三之公川吉野川源流、一泊研修旅行は高知の牧野植物園(植物学の父)、さらには斑鳩三塔、下ツ道（二階堂～羅生門）など奈良（大和）の古道、寺社仏閣、自然観察などを行いました。

2018年は、曽爾高原・屏風岩の花見、葛城古道、夏季研修会は大台ケ原西大台、一泊研修は台風後の飛騨、上高地、白川郷へ。そして龍王山、安堵町から廣瀬神社。

2019 年は、奈良の三名椿、柳生街道、夏季研修会は、明石海峡大橋の登頂、一泊研修会は十津川、玉置神社の散策、大和三山、明神山など。

2020 年は、4 月～11 月までは、コロナ禍のため中止しましたが、少しコロナ禍が落ち着いたので、12 月は久しぶりに二上山、下ツ道を歩きました。

2021 年度は、笠置山の花見、横大路散策。夏季研修会はコロナ禍のため、富山、立山は中止して、11 月に 20 周年として大台ケ原方面への一泊研修旅行を行いました。12 月の矢田丘陵は、雨のため中止で、2 月に幻の大仏鉄道を訪ねました。

これからも「会員相互の親睦」と「会員の知識向上」を目指し、奈良（大和）の自然・歴史・文化の探求を目的に大和の古道を歩き、旧跡を探訪していきます。その中で自然（樹木・山野草・野鳥など）と触れあい、神社仏閣を見学し、その地域の歴史・文化を学び、新たな発見へといざないたいと思います。

コロナ禍の中でやむなく中止することもあるかも知れませんが、十分に対策をとりながらできるだけ実施したいと思います。

まず今年は聖徳太子 1400 年遠忌で聖徳太子のお寺を歩くなど大和の古道・お寺など散策したいと思っています。年に６回の企画の中で１回は他府県への一泊研修旅行などを検討しています。皆さんの要望・意見などを参考に計画を立てたいと思います。

年 1-2 回は、臨時会議を開き、幹事の方の中から各月において研修会の担当をお願いしていますのでご協力をお願します。

企画に対しては、下見、案内用ポスター、資料を作り、募集など募り、参加後のアルバムを提供していきたいと思っています。

令和４（2022）年度は６回計画しています。

４月　信貴山朝護孫子寺・信貴山城址の桜

６月　矢田丘陵、アジサイの矢田寺、松尾寺など

８月　１泊研修旅行、

高野山を歩く、九度山（デラックスバス）

世界遺産高野山真言密教の聖地を訪ねて

宿坊泊（夏季で高野山は標高 900mで温度差が 4-5 度あり、過ごしやすいです）。

11 月　天川村、紅葉のみたらい渓谷ハイキング

12 月　奥春日山原始林遊歩

令和５（2023）年

２月　法隆寺涅槃会・藤ノ木古墳

新型コロナが収束するのを期待して、10-11 月ころには一泊研修旅行も企画する予定です。

次年度より会議を通じて幹事会のメンバーにより、大和の古道、自然、旧跡、神社仏閣などのテーマを決めていきたいと思います。

（文責　冨井忠雄）

自　然　教　室

～ この５年間を振り返る ～

月例研修会、ならやま里山林景観整備事業（所謂ならやまプロジェクト）と並び、長らく当会の三本柱と称されてきた自然教室は、今から 12 年前、2009 年（平成 21 年）、シニア自然大学校インタープリテーション科においても代表を務められた倉田さんが中心となり立ち上げられ、佐保川小学校、佐保台小学校の放課後子供教室を皮切りに、校庭での自然観察会や自然工作を実施。子供たちに自然の不思議や魅力を伝えることを目的に活動してきました。

五感を使って自然に接する校庭の自然観察会は子供たちのみならず学校や保護者の皆さんにも受け入れられ、その後自然教室チームメンバーも徐々に増え、学校への働きかけ等を通じ、少しずつ規模を拡大するとともに、会員向けの自然観察会も実施してきました。

しかしながら、5 年目を終えるあたりから、①活動に参加できるメンバーが限られ特定の者に固まってしまう。②行事を企画し取りまとめるリーダーが現れない。③自然教室チームの活動全体を取りまとめるコアスタッフの後継者が見つからない。という問題が顕在化してきました。実際、2016 年（平成 28 年）には当時の代表から、ご自身の健康問題もあり、自然教室チーム解散の話が浮上。会の柱であるべき自然教室消滅の危機に見舞われました。

そうした中、解散動議が出され自然教室最後の打合せになるであろう席で、これまでおんぶに抱っこで代表一人に任せっきりであった責を感じ、当時副代表であった筆者が自ら名乗りを上げ、代表をお引き受けすることになりました。

当時の思いは、自然教室そのものが当時のメンバー全員で長年にわたり培ってきた当会の財産であり、代表一人の去就にその存続が左右されるようなことがあってはならないという強い思いでした。

今思うと十分な知識も経験もないずぶの素人の怖さ知らずの浅慮によるものと言わざるを得ませんが、倉田さんがこれまでにしっかりと整理し残してくださったたくさんのインプリモデル（自然観察のポイントごとのシナリオ）や自然工作の資料を前に学校支援だけはこれで何とかやっていけると確信を持ち、観察会での子供たちの笑顔も思い出し、「今やらねばいつできる」「俺がやらねば誰がやる」の思いで、知らぬ間に一歩足を前に踏み出していました。

とは言え、自然教室メンバーの高齢化と減員による戦力低下は否めず、新体制となった自然教室チームでは、現状の立て直しを最優先に放課後子供教室については、佐保台小学校、授業の一環としての学習支援は、育英小学校のみに絞り再出発を図ることにしました。

その間、自然に造詣の深い旧知の大阪自然史博物館友の会副代表の田代貢先生を講師にお招きし、会員向け自然観察会の更なる内容充実を図り、自然を愛する仲間作りに努めました。

その後 3 年間にわたる活動で、学校支援については上記2校の学習支援の活動にも手応えを感じ、会の自然観察会で得た自然愛好家同志を新戦力に自然教室チーム立て直しを更に一歩進めようとする矢先、今回の新型コロナウィルス感染拡大によるパンデミック騒動となりました。

自然についてのものの見方は色々ありましょうが、私自身は、「自然とはある意味地球の健康状態」との位置づけでとらえています。

これからの５年間を論じるに当たっては、このコロナ禍がいつまで続くのか、見極めていかねばなりませんが、ウイズコロナの時代にもマッチする生活様式を見据えながら、こんな時代だからこそ、自然への限りない敬愛のもと造詣を深め、次世代の子供達に自然の素晴らしさ、自然を守ることの大切さを更にしっかりと伝えていきたいと思います。

（文責 辻本 信一）

歴史文化クラブ

～ ８年間の活動を振り返って ～

「大和は 国のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 大和し うるわし」と歌われた大和の自然・文化は、長い歴史を経て形づくられました。大和の自然をより深く理解するためには、まず歴史を知らなくてはならないと考えた結果、2012 年 2 月、川井秀夫（代表）、古川祐司、鈴木末一、弓場厚次の 4 名が発起人となり、「歴史文化クラブ」 を開設することになり、幹事会の承認を得て発足しました。

この2012年は、「古事記」編纂1300 年に当っており、初年度の統一テーマは 『古事記と出かける旅』としました。第一回目の研修会は、「稗田阿礼の出生地を歩く」と題して、大和郡山市の「売太神社」（稗田阿礼・天鈿女命・猿田彦命を祀る）を訪れました。以後、年6回程度の歴史探訪を実施し、これに加えて、12月には、地元史の探訪を中心に、座学（講義と議論）の時間を設けることになりました。

当初は、歴史好きの素人集団という実態でもあるから、各自が担当テーマごとに学習し、相互に知見を深めることになりました。また、アドバイザーとして岩本次郎氏（国立奈良文化財研究所 元・情報室長）に専門的なアドバイスをお願いしました。

最初の3年間は、奈良県を中心に「記紀」ゆかりの地を訪ねて、古代ヤマト王権の生い立ちの歴史を中心に議論し理解を深めました。4年目の2015年からは、探訪の範囲を広げて、古代ヤマト王権に影響を与えた周辺のクニグニ （出雲、丹波、越、吉備）への一泊研修を実施し、古代の日本海文化圏とヤマト王権との交流の跡を辿り、より多角的な視点でヤマトの歴史を学んできました。

さらに、杉本登氏のご協力を得て、万葉集を通して歴史の流れに垣間見える人々の実像に迫る試みも取り入れました。 2017年9月には、指導者の川井会長が突然ご逝去されるという事態に遭遇しましたが、新代表：古川祐司、事務局長：中井弘の体制のもと、世話人一同がよく結束し、その衣鉢を継ぎ、粛々と活動を進めることができました。

古事記編纂1300年にスタートした歴史文化クラブは2020年、8年を経過しました。『古事記と出掛ける旅』で始まった研修会のシリーズは、既に目ぼしい所を行き尽しており、当初の目的は概ね達成されたと判断されました。この年は、「日本書紀」編纂1300年に当たります。世話人会で種々検討した結果、2021年3月をもって一旦終止符を打つことに決定しました。歴史を愛する人材の層も厚くなっており、次なる展開は、新しいメンバーによる新しい視点で、活動の在り方を模索すべきであるという結論に達しました。

この8年の間、世話人各位の情熱と、50人を上回る会員各位のご支持により、歴史文化クラブは、大和の歴史について、学び、現地を踏査し、議論しました。これを通じて会員相互の親交が深まり、これは奈良・人と自然の会の活動にも好影響を与えたものと考えています。改めて、世話人各位のご尽力と、会員メンバーの皆様、奈良・人と自然の会関係者各位のご協力に心から感謝と敬意を表する次第です。

なお、歴史文化クラブのさらなる発展形として、自由で活発な歴史談義を中心にする「歴史同好会」を、発足させる動きとなっています。「歴史文化クラブ」が播いた種が、さらに大きく広く発展することを期待したいと思うものです。 （文責 古川祐司）

ならやま歴史同好会の発足について

～大和・奈良の歴史を楽しもう～

１．歴史同好会発足の経緯

「歴史文化クラブ」は、古事記編纂 1300 年にあたる 2012 年に発足し、以来 8 年の間、大和の古代史を中心に遺跡や史跡を探訪してほぼ当初の目的を達し、令和２年度をもってその活動を終了しました。

しかし、古代史の宝庫とされる奈良・大和に所在する「奈良・人と自然の会」には、多くの歴史愛好家が居られ、日本の古代史における大和の位置づけを更に深堀りして一層の理解を深めたいとの要望が寄せられ、同好会会員全員が運営に参画する参加方式によって「同好会」としてスタートしました。

２．大和の古代史・初期大和王権

三世紀初頭に三輪山山麓に纏向遺跡が出現し、その域内に纏向古墳群が築造されていました。また巨大前方後円墳の箸墓古墳などは、邪馬台国の存在や大和王権の誕生を窺わせる遺跡として注目されております。

資料としても「記紀」から謎が多いとされる四世紀の政治的変革の状況が、神話の形や「神武東征」という物語になって私たちにヒントを残しています。

大和王権の初代王は崇神天皇とする説が有力で、崇神・垂仁・景行天皇の王宮が磯城・纏向地域に伝承されていて、三輪山山麓に初期大和王権が成立したことを示しています。六～八世紀にかけては磐余から飛鳥浄御原宮・藤原京・平城京と遷都しますが、古代大和は常に政治の中心にあり、古代国家・大和王権形成の舞台となってきました。

３．歴史同好会の構想と運営

主旨：歴史愛好家による同好会とし、会員の相互研鑽を通じて大和・奈良について歴史談義を楽しめる場とします。テーマは各自の提案により決定し、楽しみながら啓発を図る自由で闊達な歴史論議の会を目指します。

会員：歴史に興味を持ち、学び、同じステージで活動できる人で構成します。会員は年一回は必ず世話人を担当していただきます。

開催方法：奇数月で年 6 回実施します。加えて現地訪問のほか討論会、発表会も適宜実施します。

世話人：３人１組で実施します。史跡・遺跡探訪、西部公民館・ZOOM 会議、歴史博物館・発掘公開現場訪問など行います。

運営上の改善：適事改定し、よりよい同好会に仕上げていきます。

事務局：代表：中井弘・八木健彦・青木幸子、
顧問：古川祐司・坂東久平

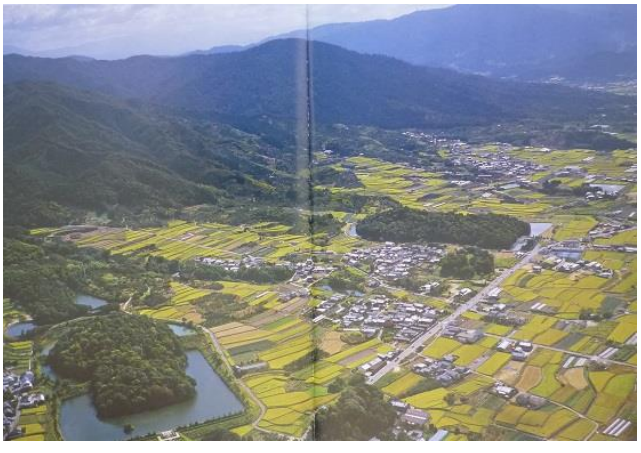
４．2022 年度テーマ：（内定）

◆橿考研博物館･橿原神宮･神武陵･神武東征　◆行基の足跡と人間像に迫る　◆内山永久寺と廃仏毀釈　◆近世の村落共同体　◆大仏炎上と東大寺　◆邪馬台国論争（九州説の視点から）　◆竜田古道と万葉歌碑

その他テーマ例示

・平安遷都後の大和、海人族の足跡、逆賊・蘇我氏を考える、平城宮跡の保存と棚田嘉十郎、仏像を学ぶ、大陸･朝鮮半島の交流と渡来人、大和王権の成立　など

（文責　中井弘）



初期大和王権が成立したとされる三輪山山麓地帯

そ ば 文 化 ク ラ ブ

～ 10年の歩み ～

平成22年３月に誕生した「そば文化クラブ」は、笹薮跡に畑地を作り、荒地に強い蕎麦を播くことを通して「ならやまの景観づくり」の一環を担ってきました。

1、そば文化クラブの発足

「男のロマン　蕎麦の栽培から蕎麦打ちまで」を掲げて、会員を募集。たちどころに十数人のメンバーが集まり、会の承認をうけて、晴れて蕎麦作りの先兵「ならやま・そば文化クラブ」が発足することとなりました。

2、畑づくり、人づくり

蕎麦の栽培については全員がずぶの素人。栽培のノウハウから収穫、脱穀・乾燥、製粉、さらには蕎麦打ちの技能まで、一から学ぶ必要がありました。桜井市の「荒神の里　笠蕎麦」は栽培から蕎麦打ちまで一貫して行い、直営店の「荒神の蕎麦」は有名。こちらにお願いして、我々メンバー全員で蕎麦栽培の学習と、そば打ちの手ほどきを受けることからスタートしました。

3、「そば打ちの自主研修」

講師に田辺　保氏を招聘し「蕎麦打ち自主研修会」を開設することにし、毎月　1　回の研修会がスタートしました。自分で打って試食し、味を皆で確かめる研修会に、毎回　20　名前後が参加しました。女性陣の行き届いた気遣いもあって、楽しい雰囲気で大いに盛り上がりをみせ、「そば栽培から蕎麦打ちまで」を、自力と工夫で推進することに、手応えを感じつつ、景観形成の先兵という使命感と、「栽培から蕎麦打ちまで」という「男のロマン」に浸りながら、メンバーの連帯感は着実に盛り上がっていったのです。

実りの森そばの開花

4. 収穫祭「新そば祭り」を楽しむ

そば自習打ち

“新そば祭り”そばの釜茹で風景

一番人気のそば盛り付け風景

秋、蕎麦が収穫されると、自前のそばを使って、「新そば祭り」を開催することが可能になりました。100　人規模の参加者を対象に、150　人分の蕎麦を打ち、その場で振舞うという「ならやま新そば祭り」は、平成　22　年　11　月を第一回に平成　31　年まで毎年実施し、ならやま秋の名物行事となって、会員の皆さんを楽しませました。

5、そば畑の展開と終焉

ならやまの景観形成の一環として、「そば文化クラブ」が進めてきたそば栽培は、令和元年度をもって終結し、そば栽培の中心「実りの森」は、その後「果樹園」へと変身することになりました。

6、そば文化クラブの今後

第　10　回を数えた、ならやま名物の「新そば祭り」も令和元年　11　月　28　日、惜しまれながら終焉の日を迎え、「そば文化クラブ」は、そば打ちを楽しむ同好会として、さらに技量を磨きつつ、メンバー相互の懇親を深めるとともに、会の親睦行事などへの協力をすることとしています。

（文責　古川祐司）

クラブ・ユートピアの夢

～里山林のシンボルとしてのアカマツ林の再生～

初代会長川井秀夫さんが提唱された「ならやまユートピア構想」とは何でしょうか？ ならやまプロジェクトに参加する仲間一人ひとりが描く夢をできるだけたくさん追い求めて、その最大公約数としてのならやまを実現することだったのだと思います。

ならやまはその昔アカマツ林だったとのことで、当然、マツタケもよく獲れたと聞きます。今はコナラが中心の落葉広葉樹林ですが、10年程前にその一角でブッシュを整備してギャップが生まれたとき、数十年の眠りから目覚めてアカマツの苗木が大量に実生しました。2016 年の新春、吉村文彦先生の「里山は重要な生態系」～万葉の里にまつたけの夢を見る～と題する講演で、「燃料革命～里山の喪失～アカマツ林の喪失～マツタケの希少化」 が進んでしまったことに対し、里山再生活動の一つとしてアカマツ林再生、マツタケ復活を実現した鹿背山について話がありました。そうして里山再生を目指す私たちにとって、アカマツ林の再生も視野に入れるべきではないか、その先には特用林産物の副産物も期待できるかもしれないとの思いから、私たちの「ユートピア」への挑戦が始まりました。

目標はマツタケの夢を秘めた「アカマツ林のある里山の再生」です。マツ類は代表的な菌根性樹種で、土壌養分の吸収は事実上すべて菌根菌を介して行っています。菌根は普通の根が侵入できない微小な隙間から養分を吸収できることに加えて、土壌病害に対する防御機能も持っています。この養分吸収力アップ、病害耐力アップのおかげで、マツは栄養の乏しい乾燥した環境でも育つことができるのです。そしてこの菌根はほとんどが菌根菌によって作られるのであり、マツの場合はマツタケ菌なのです。

マツ林はもともと先駆的性質を持っており、火山灰できた痩せた土地でも菌根菌がいればその力を借りてマツは育つことができます。けれども森林の遷移の進行に従えば広葉樹に置き換わってしまいます。このような樹種交代は光をめぐる競争などでも説明されますが、菌根菌の性質にもよっています。菌根菌は有機物の多い土壌を嫌い、肥沃化した土地では減少してしまうのです。そのため肥沃化した土地ではマツはぜい弱化して広葉樹に負けてしまうのです。里山ではマツ林は松葉、松かさ、枯枝、灌木など暮らしていくための資源の塊でした。人間が必要な資源を得るための松葉掻きや柴刈りは、土壌の肥沃化を防ぎ、菌根菌を、そしてマツ林を守ってきたのでした。里山のマツ林は、マツと菌根菌の二者共生ではなく、人間を含めた三者共生の象徴だったのです。マツタケはそのご褒美・芸術品と言えるものです。

2017 年からアカマツ林の整備が始まりました。アカマツとツツジだけを残して他の雑木を除去し、協働活動による地掻き(腐葉土を取り除く)を繰り返しました。特に笹とアカマツは仲が悪いとされ、笹の除去を念入りに行いました。それは大変な作業でした。

2018 年 9 月アカマツ林の再生とそのための特用林産物の復活を目指して、クラブ・ユートピアが誕生します。大和菌学研究所のご指導も仰ぎながら、菌根菌の植菌も行いました。その後も笹、草、雑木の除去と地掻き、アカマツの剪定を繰り返してきています。「アカマツの森」のマツはおおむね樹齢 10 年程度の木です。樹高は5m を超え非常に立派に元気に成長しています。最近間伐もし、2022 年春には再植菌を行う予定です。

マツの寿命はマツ枯れ病などに害されなければ数百年と言われており、私たちのアカマツ林はまだまだ赤ん坊です。それでも菌根菌とともに人間との三者共生によって懸命に育とうとしています。私たちは必ずやアカマツ林を健全な形で再生し、うまくいけば一時的にでもマツタケの復活もと夢見ています。

(文責　八木健彦)

会員の思い（2021 年８月アンケートから）

＜回答者の概要＞（回答者数 88 名/会員数 162 名⇒回答率 55%）

男 64 名 女 24 名　　平均年齢 75 歳　　在籍年数 8.5 年

ならやま参加者 80%　月例研修参加者 40%　自然教室参加者 20%

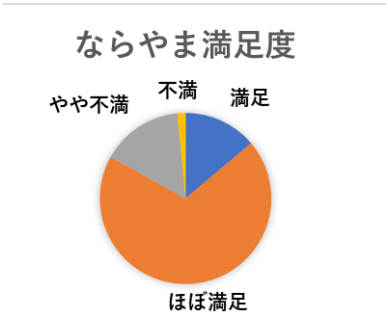
（いずれもコロナ禍が長引く中で、活動が抑制されているため、参加率や回答内容に影響していることも考えられる。こうした観点からはアンケート時期が適切でなかったかもしれない。）

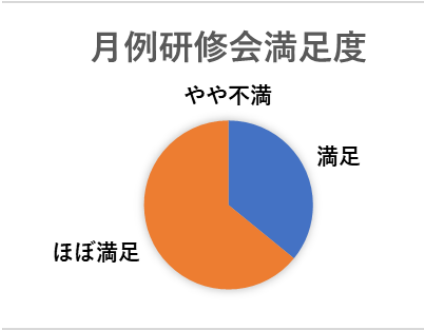
＜参加満足度＞

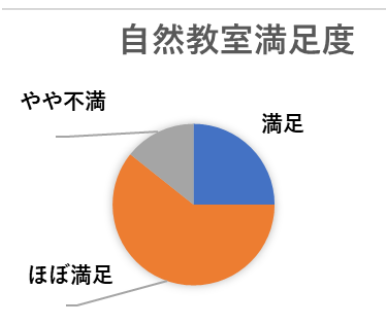
・総じて満足度は高いレベルにあり、コメントにはそれぞれの活動の世話役に対する感謝の言葉が多く見られる。

・ならやま活動について、やや不満の背景には、マンパワーの低下による負荷増大が大きいが、意思疎通・風通しの悪さを感じている人もいる。

・月例研修には、好評だった所へのリピート実施を求める声がある。





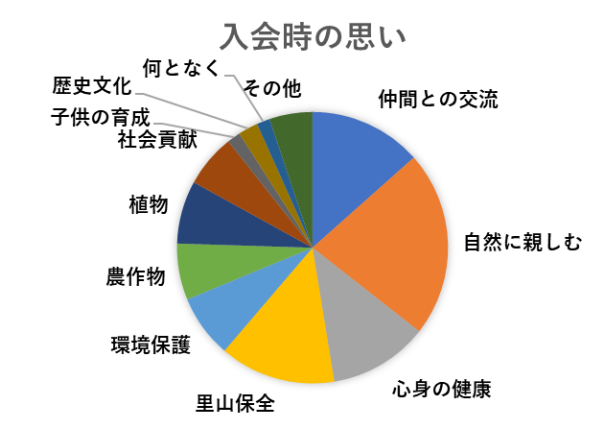


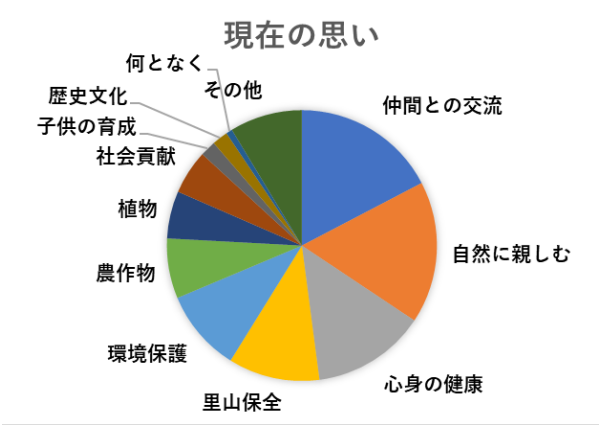
＜会員の思い（参加目的）＞

上位の５つは入会時も現在も変わらないが、現在の順位は

①　仲間との交流、②自然に親しむ、③心身の健康、④里山保全、⑤環境/生物多様性保護

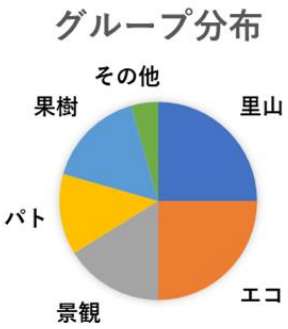
となっており、入会時からの変化としては、漠然とした「自然に親しむ」や特定目的の「里山保全」「植物観察」が減少し、高齢化を反映してか「仲間との交流」「心身の健康」「環境保護」そして「その他」（それぞれに個別の楽しみ方を見つけたか?）が増加している。





<ならやま活動について>

ならやま参加グループ分布

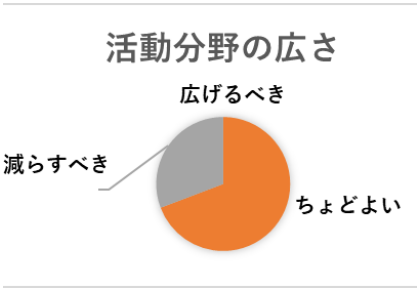


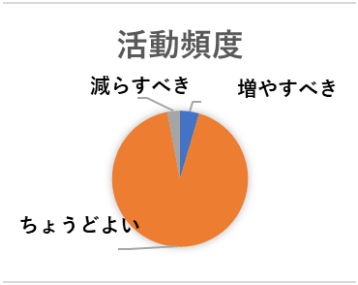
里山とエコで 1/4 ずつの半数、景観、パト、果樹で残り半数となっており、ほぼ現状の活動状況を表している。

活動分野については、満足度のところでも記したが、マンパワーの限界を感じている人が多く、30%の人が縮小も考えるべきとしている。

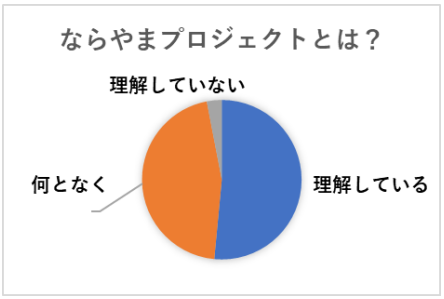
活動頻度は現状維持となっているが、仕事量からは活動頻度を増やす必要性を感じつつ、今以上の負荷増大は難しいことが背景にある。

活動日については、高齢化、会員減少に対応するためにも、働いている人の参加できることを含めて工夫が必要と考えている人が 30%いる。





ならやまプロジェクトについての理解は、理解している人が半数にのぼるが、「何となく」の多さからは、会員によって理解が異なっていると思われる。



<会員の思い（得たもの、あなたにとってのならやま）、今後のあり方について>

記述されたコメント・意見の集約

得たもの：23⇒8　あなたにとって：58⇒7　今後のあり方：73⇒29

そして、集約した内容をタイトル化して整理した。（別紙：記述意見の集約）

① 会員の思い

ならやまの素晴らしさ、そこに集う魅力ある人々、生活の一部としてかけがえのない活動の場であることが言葉を変えて異口同義に記述されており、眺めてみると、会の理念に通じるものがある。

② 今後のあり方について

タイトル化された意見を整理してみると、「私たちはどこに向かうのか？」「その具体計画と資源の裏付けは？」「そのためのよりよい組織運営は？」という三つのカテゴリーにおさまるようである。こうしてみると、さまざまな課題が見えてくるような気がする。

記述意見の集約

<会員の思い（参加目的）>

仲間作り/
仲間との交流

自然と親しみたい

健康増進/
爽快感

里山保全、自然環境/
生物多様性保護、

植物観察/育成、
農作物育成/収穫

社会貢献

<あなたにとっての「ならやま」とは?>

仲間との共感・共有

やりたいことができる
セカンドライフステージ

癒しの場所、
人間は自然の一部

心身の健康

持てる能力の発揮場所
（自己実現・存在感）

役割・仕事とやりがい

作業達成感・充実感

新たな発見と知識・技能の習得

里山の歴史的背景を知る

高齢者集団活動の社会的意義

<当会の理念>

自然との共生

地域への貢献

生き生き活動

明　る　く　　楽　し　く　　無　理　を　せ　ず

自　然　環　境　と　歴　史　的　風　土　を　次　世　代　に　ひ　き　つ　ぐ　た　め　に

<今後のあり方>

中長期目標

ならやまプロジェクトとは?

ならやまユートピアとは?

各グループ主要メンバー
検討会立ち上げ

成熟期のあとに続くべき活動は?

高齢化、会員減への対応

里山林保全の優先

最低限の里山保全とは?

子供たちのために

地域への解放

「シニア」ボランティアとして無理ない活動

目標不要（目の前に仕事があればいい）

動機付けも含めた
活動拡大

具体計画

存続要件=
人・意欲・物・金

何のためにどれだけ資源が必要か

里山林保全人材の育成

産出と消費のバランス

活動計画と資金計画のつながり

支出・サービスの見直し

組織運営

世代交代の必要性

一部人材（幹事）に負担が偏っている

グループによる分断化

公正・公平な組織運営

フランクな組織運営

意見をくみ上げる仕組みがない

懇親・交流機会が少ない

活動継続の難しさ

アンケートを踏まえつつ

千載 輝重

私たちの参加目的は、里山林保全、生物多様性保全などの特定の社会貢献への思いを強く持っている人もいるが、高齢化が進んでいることもあってか、仲間作り/仲間との交流、心身の健康、自然と親しむといったセカンドライフをゆっくりと楽しみたいとの思いを持っている人が多い。それでもこうした思いは、集団社会活動を通じて社会とかかわり何らかの貢献につながっていることは間違いない。当会の理念である「自然との共生、地域貢献、生き生き活動」そして「明るく楽しく無理をせず」が共感を得ている所以であろう。

当初は少数でもあり意思疎通も円滑で目標も共有しやすかった。目の前に存在する壁を破ることを目標に、一体となって活動することによって、数年のうちにほぼその目標を達成した。その時点で現在のならやまの原型ができあがった。その後成長期には、地域参加型の活動が定着し、会員数が増加、それぞれが描くさまざまな夢（やりたいこと・セカンドライフ）に向かって活動が拡大、賛同いただく諸団体からも多くのご支援をいただいてきた。そのかいあって、私たちのならやまはさまざまな人たちが楽しめる多様性に富むユートピアとなった。

そして成熟期になり、拡大した活動を維持するために様々な活動分野を担うグループが編成され、より組織的な活動となった。会員はそれぞれが好むグループに分散したが、強いリーダーシップが働き、執行部が中心になって活動を誘導することによって、集団活動を取りまとめてきた。

20 周年の節目に実施したアンケートのコメントや自由記述にはさまざまな意見が記され、これまでの会の運営と現状への感謝の言葉とともに、運営に対する不満も見られた。膨れ上がった集団であり、いろんな意見があって当然である。それでも人・物・場所・金に恵まれて、活動に対する満足感は高い。けれども、それらは有限であり、うまく運営できないと歪みを生じ、最低限の価値観を共有できないと集団は崩壊してしまう。そのためには、やはり「何のために?」について共有・共感する必要がある。今回アンケートを実施した目的は会員同志がどのような気持ちで（何のために）活動に参加しているのかを共有することでもあった。

「何のために?」にもレベルがあり、いわゆる楽しみともいえる参加目的は「理念」であり、先行きの不安や不満に応え、それらに起因するさまざまな課題を克服し一体感を醸成していくためには「どこに向かって?」が不可欠である。アンケートの中に「理念は理解できるが、ならやまプロジェクトって何？ 事業が進むにつれてプロジェクトの定義は変わる」との記述があった。そのとおりである。

組織はプロジェクトの集まりであり、プロジェクトには目標と期限がある。いわゆる 5W2Hが問われる。私たちの活動を考えてみる。

WHY（何のために、なぜ）
　仲間との交流、生き生き活動、自然との共生、
　地域貢献
WHAT（何を）
　ならやまの景観形成保全、ユートピアの実現、
　自然・文化と親しむ活動
WHO（誰が）
　仲間とともに、
　地域の方や支援していただける諸団体とともに
WHERE（どこで）
　ならやまを拠点として
WHEN（いつまでに）
　???少しずつでも前進できればいい
HOW（どのようにして）
　???仲間と力を合わせて
HOW MUCH（どんな資源を使って）
　???無理のない範囲で調達できる資源で

どうも全体として答えようとするとぼやけてしまう。各グループでは明確に答えることができるだろうか?「何のために」がはっきり見えるだろうか？ その集約が全体で共感できるだろうか?

私たちは組織としてはまだまだだと思う。でも「仲間への尊敬と感謝」に根付く「力を合わせる強い集団」だと信じている。これまでに積み上げられた成果が大きいだけに、新たな目標を定めにくいのも事実であり、その成果を維持することの難しさもある。円熟期にある今、どこに向かって力を合わせるのかを共有することで、より強い集団になれるのではないか。そのためには、もっともっと話し合い、理解しあうことが大切である。今回のアンケート結果がそのきっかけになればと願っている。

20 周年節目の取り組み

20 周年記念研修旅行
紅葉の大台ケ原（東大台）と奥大和を訪ねて
月例研修会企画

2021 年の月例研修会一泊旅行は、当会 20 周年記念研修会となり、このコロナ禍の中、充分に対策をしながら、11 月 1 日（月）・2 日（火）と 2 日間デラックスバスにて紅葉の大台ケ原、奥大和へ 2 年ぶりの 1 泊研修旅行を行いました。24 名の参加者で久しぶりに皆さんとの親睦が図れました。

1 日目：奈良商工会議所前 8 時出発、バスの中で会長が緑綬褒章（社会奉仕活動功績）を受賞した事を話されてうれしいニュースでスタート。169 号から道の駅杉の湯川上でトイレ休憩して、途中車窓からの美しい紅葉を見ながら一路大台ケ原駐車場へ。当初は雨の予報であったが、着いてみると晴、気温も 20 度で最高の天気になりました。

駐車場から標高 1695m の日出ヶ岳山頂に向かい、急階段を登り、頂上に着きました、三重の海を一望しながら、来る途中で仕入れた柿の葉寿司弁当を食べました。その後トウヒ林の正木ヶ原峠、正木ヶ原、尾鷲辻、牛石ヶ原を抜け、大蛇嵓では足が竦む断崖絶壁と紅葉が素晴らしく、私たちシニアには最後の機会かもと思い先端まで行きました。そこからシオカラ谷コースと中道コースに分かれ、それぞれの体力にあった道を歩き、駐車場で合流しました。遠く近くに見え隠れする紅葉と連なる山々、雄大な大自然を満喫した 1 日でした。

17 時 30 分ごろホテル杉の湯に着き、大浴場にゆったり浸かったあと夕食懇親会が始まりました。披露された「ならやま音頭」にも 24 人拍手喝采で久しぶりに盛り上がり、今回は新しく参加の方も多くて、なお親睦が深まって良かったと思います。

2 日目は、大滝ダム建設の為に現在の場所に移転された丹生川上神社上社に向かいました。この神社は天武天皇が建立し、龍神、水の神です。次に向かった蜻蛉の滝は落差 50m で迫力があります。雄略天皇を虻から救った蜻蛉（トンボ）伝説から命名され、松尾芭蕉、本居宣長などの有名人が数多く訪れている歴史ある滝でした。ここから東吉野村の丹生川上神社中社へ。上社と同じ天武天皇の創建で絵馬発祥の一社です。近くには神武天皇のゆかりの地、夢淵、東の滝などあり歴史を感じました。途中旧校舎を再利用した「ふるさと村」の河原で昼食をとり、きれいな水、美しい紅葉など楽しみました。

昼食後、天誅組終焉の地へ。1863 年、倒幕の兵を挙げ、大和五條代官所を襲撃し、幕府方から追われ東吉野村で 15 人が戦死。その後薩長同盟、王政復古、明治へと。村人は墓碑を建て慰霊と顕彰を行い現在に引き継がれています。次は八咫烏神社へ。神武天皇を熊野吉野の山中から大和へ道案内し勝利に貢献した八咫烏大神（伝：建角身命の化身）が御祭神で、日本サッカー協会のマークにもなっています。

最後の帰りのバスの中では、小島さんが用意してくれたクイズ大会に盛り上がりました。時間も忘れて無事近鉄奈良駅に着き解散いたしました。

今回は、天候に恵まれ、雄大な自然と紅葉、歴史に触れた旅行で 20 週年記念に相応しい研修会になりました。

この企画、準備においては、幹事の福田、小島、青木、戸田各氏の協力に感謝申し上げます。有難うございました。　　（文責　冨井忠雄）

“天然ミネラル”を学んだ ペタキン先生の講演によるならやま研修会

「ならやまの何かが変わる」。そんな「予感」を感じさせる講演だった。

きわめて異例で緊急的なならやま研修会が2021年12月18日、奈良市法蓮町のリガーレ春日野で行われた。ビオトープで絶滅危惧種の淡水魚の奈良地方名ペタキン（ニッポンバラタナゴ）の飼育を指導していただいている近畿大学農学部准教授の北川忠生先生による講演である。

まず異例だったのは、講演のきっかけが新聞記事だったことである。9月15日付の朝日新聞社会面に「世界遺産で大和野菜　興福寺と近大生」という記事が大きく載った。指導者は北川先生である。畑づくりのエコファームの仲間から「面白い」という反応はあったが、それ以上のリアクションはなかった。しかし幹事会が素早く取り上げ、講演会を開き北川先生から話を詳しく聞くことにした。その月の幹事会で決定、11月号の会報誌で広報、ただちに参加者を募るというスピード感あふれる運びだった。 幹事会は、ニュースに接して、「これはならやまを動かす何かがある」と、六感が働いたのだろうと推察する。

北川先生が自ら「畑を耕す魚類学者」と題したように、講演の最大の関心は、ペタキンの飼育に情熱を注ぐ北川先生がなぜ農業にかかわるのか、だった。

ペタキンはドブ貝の中に卵を産み、ドブ貝はヨシノボリというハゼの仲間の魚のヒレに卵を産みつけ成長する、という生態系が必要である。つまり、ペタキンを育てるためには、その生態系を守らなければならないのである。北川先生は、大学の中で、希少魚用のため池を造り、畑や田んぼを造り、水路で水を回して生態系を守る環境を整えた。すると、ホタルが飛び交い、カエルが何種も発生、ペタキンも増えた。池や水路をしゅんせつしたヘドロは、畑や田んぼの肥料にしたところ、豊かな実りを得られたという。ペタキンを飼育するための環境を整えることで里山のような自然が蘇ったのである。つまり、ペタキンを育てるということは、そのための生態系を守ることであり、生態系を守るということは里山を復元することであるというのだ。その過程で、池や水路のヘドロで畑や田んぼを実らせることができることが分かったというのである。それが興福寺でのヘドロによる大和野菜づくりとなった。

やや回りくどいが、魚博士がなぜ畑や田んぼを耕すようになったかはわかった。池や水路のヘドロを肥料に野菜や米を作る。即ち〝天然のミネラル〟を軸にした里山の復元が、生態系を守ることに通じるのだ。

だから、畑や田んぼへの肥料代を節約しようなどという低次元な話ではない。水路や池にたまるヘドロには、木の葉や小枝が沈殿して腐食し栄養となる。また、土壌から栄養分がしみ出し、豊かな栄養剤となる。これを肥料に用いることは、生態系のサイクルを回しながら、野菜や米も、そして結果的にさまざまな生物をも生かすのである。壮大で創造的な事業である。まさにSDGs（持続可能な開発目標）の好例といえよう。

同時に、私たちが日々汗して取り組んでいる里山の復元と活性化がとりも直さず生態系を守ることであると知って、いかに重要な意味と意義を持っているかということを改めて確信させられた。

すでに、ならやまのヘドロは土壌検査に回されている。安全性が確かめられれば、肥料化の作業へ進む。中長期的な計画を作らなければならない。土壌検査や、できた野菜や米の科学分析などで、農協とのタイアップも模索しなければならない。「予感」は「現実」味を帯び始めている。

ところで、異例ついでに特筆したいのは、講演会で〝北川プロジェクト〟の近大生6人が当会会員と机を並べて聴講し、講演会後、北川先生とともに彼らも懇親会にも出席。おじいさん、おばあさんの年代の会員たちと「世代間交流」を繰り広げたことである。

懇親会では、自己紹介あり、将来やプロジェクトについてのスピーチあり、ニッポンバラタナゴの大阪地方名キンタイの試食会（ため池しゅんせつの際出た死骸の唐揚げ）ありで、会員たちも大いに楽しんだ。ともに学び、ともに語り合う講演会は世代間の架け橋にもなったのである。これも、これからのならやまについて何かを予感させてくれた。　　（文責　吉川利文）

みんなの想いが小魚たちを守る
（猿沢池の漁礁づくり）

近畿大学の学生が中心となって、奈良公園周辺の環境調査・保全活動を行っている「ひとななプロジェクト」に賛同し、私たちの夢を墨で寄せ書きした興福寺の古瓦で、猿沢池に漁礁を作りました。

８月にお預かりしたのは興福寺南円堂の古瓦で縦横 40～50ｃｍもある大瓦 17 枚で、１枚に 3～5 名、ならやまプロジェクトに参加する会員約 50 名が、さまざまな想いを寄せ書きしました。

そして、10 月 12 日、興福寺・猿沢池の畔に 17 枚の瓦が並び、参加した有志 16 名がそこに書かれた想いに納得したり共感したり。まずは陸上で 17 枚を組立て予行演習。その後、近畿大学の北川先生はじめ学生さんたちの助けを借りながら、池の中に漁礁を作りました。

北川先生のお話しでは、17 は観音様の縁日にちなんだ数字で、漁礁は下から７枚、５枚、３枚、２枚を積み上げて作ります。この瓦の枚数には意味があり、素数（7, 5, 3, 2）で組み立てることにより「切れない絆」を表現しているとのことです。また、漁礁は古瓦自体が持つ水の浄化作用が期待できることや小魚等の隠れ家となり、水性生物の繁殖を促すことによって猿沢池の水質や環境の改善が進むことになります。こうしたお話しを聞き、自然の保護、環境保全は人や自然との縁、絆の大切さ、これらの縁、絆なくしては実現できないという思いを感じることができました。また、この日、南円堂の近くに「ひとななプロジェクト」に募金ができる自動販売機が設置されました。当会の会員が募金者第一号です。

20 周年の記念ともいえる私たちの漁礁は、これから 10 年、20 年と小魚たちの住みかとなり、次世代の人たちに環境保全の大切さを伝えてくれることと思います。

ちなみに私たちの漁礁は５基目で、猿沢池の碑がある西北端から北岸沿いに東へ 10ｍくらいのところにあります。（文責　田中善英）

アイドルとエントランスエリアの誕生
「ならやま大地号」「ようこそモンキー」
「古都に広がる里山の彩り」

一昨年の「建築ワークショップ東大寺 2020」に出展参加する 5 つの大学の 5 名の学生に竹材の提供をしたのをきっかけに、学生の皆さんとの交流が始まりました。そして、親しくなる中で当会 20 周年の記念としてモニュメント制作の提案を受けました。ワークショップも終了してさらに話を進めようとする矢先にコロナ禍が襲来、後日、モニュメントについて提案するとのことで、いったん彼らはそれぞれの住まいに戻りました。そして昨年の一月からリモートでの会議を繰り返しました。学生さんたちからは、舞台を兼ねた憩いの場所、竪穴式住居のような隠れ家、土絵具を使った動植物たち、木工による小鳥たちなど、さまざまな提案をいただきました。

その後、里山の原風景にふさわしい場所とモノを念頭に検討した結果、里山林の入り口にあたる学びの森に、子供たちを迎える「ウェルカムモニュメント」とならやま里山林に導く「機関車」を制作することが決まりました。

そして 8 月の「夏だ！休みだ！里山で遊ぼう！」イベントで子供たちを迎えることを目標に学生さんとの協働作業でモニュメント制作に取り組む計画を策定していました。しかしながらまたもやさらに勢いを増したコロナ第５波が襲来、協働作業は中止となり、結局８月のイベントも中止となりましたが、会員有志の手によってようやく 10 月末に完成し、11 月には会員からの募集による名称が決まりました。

20 周年に生まれた新しいアイドル「ならやま大地号」と「ようこそモンキー」は、ならやま里山林への入り口で、みんなを歓迎しています。

また、里山林に彩りを持たせたいとの思いから、学びの森周辺にイベント広場とそれに隣接して紅葉の映える森を一体化し「古都に広がる里山の彩り」として整備しました。この企画は第 32 回緑の環境プラン大賞で評価されて志金をいただいたおかげで実現しました。整備されたエントランスエリアは、二つのアイドルの見守る、人々の憩いの場となることと思います。

(文責　千載輝重)

図録「見つけよう自然のなかま　ーならやまの木々たちー」の編纂

前篇ともいうべき図録「ならやまの昆虫と植物たち」篇について、全国各地から多くのご意見をお寄せいただいた。賛辞の他に、もっとこの点に創意、工夫を、など、貴重なご教示もいただいた。そうした一言一言が、いつしか小生の背中を押すのであった。「里山林では、やはり樹木が主役じゃないのか」。異口同音にそのようなお声だと感じ取った。もちろん会員の皆さんの中から、樹木篇も、との声が少しずつ高まってはきていた。

先ずは人材を集めなければならない。170名の会員さんお一人お一人のお顔を思い浮かべつつ、僭越ながらリストアップ。中には個別に打診もしながら 13 名の編集準備委員(案)を選出。幹事会と記念事業企画会議に編集準備委員会構成を提示し、承認を得た。

次は、編纂発行に必要となる志金(経費)の問題だ。「昆虫と植物たち」篇は、トヨタ環境活動助成プログラム国内小規模プロジェクト助成により実現させることができた。いわばその続篇であるから引き続き助成申請をすることで幹事会の承認を得た。第一次選考と本選考の二段構えである。申請書の各項目について、所定の文字数以内に収めながら思いの丈をぶっつけた。2020 年 10 月28日、一日千秋の思いで待ち続けた第一次選考結果の通知。「通過」の吉報だった。休む間もなく本選考に向けた申請書類の作成に取りかからなければならない。関係の方々にお知恵を拝借し、字数制限を守りつつ、意図することを伝えることができる内容に仕上げなければならない。パソコンのディスプレイ左下に表示される文字数を睨みながら、推敲を重ね、キーを叩く日々が続く。時には軽いエコノミー症候群ではと感じることも･･･。

ある一定の時間パソコンと向かい合っていると、「入力時間が長くなってきています。暫く休憩しませんか」との文字とコーヒーカップのイラストが、ディスプレイ右下に表れる。それを見てはティータイム。

2020 年 10 月から、前篇と同様、表紙デザインの公募の作業。対象を、会員の家族、佐保台小学校の児童に加えて、佐保川小学校の児童にも広げた。前回は応募総数 94 作品。しかし、今度は新型コロナウイルス感染症の拡大が大きく影響し、総数 25 作品と約 1/4。それでも、どの作品にも、子どもたちの情熱が込められていた。最優秀賞には、佐保台小学校1年生の中野里々花さんの作品(写真)が選ばれた。

2021 年 2 月 19 日、吉報第2弾。トヨタ環境活動プログラム国内小規模プロジェクトの「本選考通過」である。助成が決定した。

この間、準備委員会は、メール等による情報交換を交えて、掲載樹木の特定や執筆担当など、具体的な取り組みの共通理解を深めた。樹木は、昆虫類などとは異なり、四季を通しての観察が求められるものが多くあり、約2年間のスパンが必要となる。委員会早期立ち上げの必要性は、そこにもあった。

2021 年9月ごろ、掲載樹木153種について、解説原稿などの再確認や校閲作業が一段落する。その後は、一部写真の入れ替えや原稿の再々確認も行う。全体としてのページ構成などの確認も進む。発展学習の「森の灯台」について、最終的な意見交換を 2022 年 1 月中に行い、2月中に表紙から裏表紙までを通したデータ整理を完了。3月中旬、印刷会社に製本を発注と、新型コロナ禍の影響もあったが、当初計画した編集工程に沿い無事発刊に漕ぎ付けることができた。。

こうして、編集準備委員会を立ち上げて以来丸2年以上にわたり、新型コロナの影響に悩まされつつ、会の知的財産が産声を挙げた。子どもたちが図録を手に、木々を見つめる光景が待ち遠しい。

同時に、関係者の皆様方に感謝の念で一杯である。　　(文責 図録編集委員長 鈴木末一)

活動の足跡（2017~2021 年）

【1】組織・運営

<現在の組織・運営>

2020 年 5 月総会にて組織改正を実施。それぞれの役割を明確にするとともに、会員の一人ひとりが積極的に参加できるような運営を目指すこととした。

＜役員＞					
幹事	幹事は10名以上20名までとし、その中から会長、副会長、事業部長、部長およびGLを選出する。				
監査役	1名以上2名まで			本会の会計処理内容について監査する。幹事を兼任することはできない。	
＜役職＞					
会長				会務を統括する	
副会長	若干名			会長の補佐役として特定の役割を分担する	
会計	若干名			会の金銭出納を統括し、収支予算、収支報告書を作成する。	
顧問				幹事会に出席するなどしてアドバイザーとして運営に協力する	
参与				幹事会に出席するなどしてアドバイザーとして運営に協力する	
会議体	総会	最高議決機関			
	幹事会	会の運営・事業の推進を担う幹事による議決機関			

＜組織＞					
部門	部長	グループ	GL		
総務部	部長				総務部門統括
		事務	GL	庶務	総会、幹事会の運営、保険管理、会員・関係先（名簿等）管理、安全管理
				渉外	シニア自然大学その他、外部団体との交渉・調整・関係管理
				イベント	イベント管理（個別イベントの企画運営は別途個別担当を決める）
				助成金	助成金管理（必要に応じて個別の助成金担当を決める）
		会計	GL	会計	予算管理、会計報告、帳簿管理、
				出納	出納管理
		広報	GL	会報誌	会報誌の企画・発行管理
				HP	ホームページの企画・更新管理
ならやま事業部	事業部長				PJ活動統括、進捗管理、活動記録、備品管理、活動司会進行
		管理	GL		委員長の補佐（PJ活動記録、PJ予算管理、PJ出納管理、その他）
		里山	GL	副リーダー	グループの活動計画/実行管理、予算管理、活動記録（写真を含む） 安全管理、備品管理
		エコ	GL	副リーダー	
		景観	GL	副リーダー	
		パトロール	GL	副リーダー	
		果樹	GL	副リーダー	
自然文化部	部長				自然・文化活動を通じた会員の資質の向上、活動グループの新設・廃止
		月例	GL	副リーダー	グループの活動計画/実行管理、予算管理、活動記録
		自然教室	GL	副リーダー	
＊	グループ内の組織は必要に応じて副リーダー（チーフ）の選任を含めてGLが決定し幹事会に報告する。				

<総会>

2020 年 5 月　第 19 回通常総会　組織改正

2021 年 5 月　第 20 回通常総会　会長：千載輝重を選出　鈴木会長は顧問就任

<キャッチフレーズ・ロゴマークなど>

2020 年 2 月　　創立 20 周年記念キャッチフレーズ・ロゴマーク決定

2021 年 12 月　学びの森・「機関車」（ならやま大地号）「ウェルカムお猿」（ようこそモンキー）および見晴らし台（四季の丘）の名称決定

【2】ならやまプロジェクト

＜管理区域＞　16 ヘクタール（159,792 ㎡）

（地域）	（面積）	（管理開始日）
ならやま里山林（佐紀町、奈良阪町）	73,978 ㎡	2007/4/12
ならやま彩りの森（佐紀町）	2,193 ㎡	2011/1/1
佐保自然の森（奈良阪町、法華寺町）	20,364 ㎡	2007/11/7
ならやま自然の森（奈良阪町）	43,041 ㎡	2012/2/29
ならやま実りの森（奈良阪町）	20,216 ㎡	2012/4/16

＜交流・親睦行事＞

1 月新春初出式（10 年継続会員植樹式）、3 月新入会員歓迎会、6 月じゃがいも祭り、10 月サツマイモ収穫祭、12 月芋煮会、迎春準備。

＜里山グループ＞

・2018 年　ナラ枯れ終息

2012 年 9 月、カシノナガキクイムシ侵入木確認。「早期発見・早期除去」に取り組み、2015 年をピークとして、2018 年にははほぼ終息。

・コナラ等の育苗と植樹

2015 年ギャップ地にコナラを植樹。その後、里山林中心部の部分皆伐地区に約 50 本のクヌギ・コナラを植樹したのをはじめとしてこれまでに約 300 本を植樹。植樹用苗木は「ならやま」で採取したドングリを実生として２～３年育苗したものを使用。

コナラ残存木は 2014 年 1,293 本、2017 年 934 本を調査確認し、2021 年にはサンプル調査にて変化がないことを確認。

・森林資源活用としてシイタケ栽培、2013 年からはマキの生産販売を開始。

＜エコファームグループ＞

無農薬・自然農法での野菜栽培を継続。

主要な行事：佐保台小学校の田植え・稲刈り体験、春の感謝祭、芋ほり、芋煮会などを実施。

2018 年：粘土質の強い東畑の土壌改良を目的にエスパニアを栽培。

2019 年：陸稲栽培を試行。

2020 年：コロナ禍中も自主活動などでリカバリー。

佐保台小学校の給食でならやまで児童が携わった黒米が提供された（2021 年からも継続提供されている）

＜景観グループ＞

・景観整備

大別すると「夏期の草刈活動」「冬期の竹林整備」

2016 年：それまでのベースキャンプ周辺整備作業体制からグループとして再編スタート

2017 年：ベースキャンプ周辺に加えて実りの森・彩りの森へと活動の場が拡大～拡大期
・そば畑の草刈り土壌改善等の整備
・仮払機の安全講習会実施　JA(40 名)
・ニホンミツバチ分蜂にチャレンジスタート
2018 年：佐保自然の森も加わり、ならやまの全体に活動が拡大～最盛期
・竹林整備とタケノコ収穫への取り組み
・タケノコ掘りが活動に加わる
・チッパー機、自走式草刈り機“モア”の導入
2019 年：侵入竹除去竹林整備（林野庁）の開始
・蕎麦畑終了蕎麦祭り終焉 11/28
2020 年：機械の導入による景観活動の維持期～マンパワー減少
・スパイダーモア 1 号導入
2021 年：景観整備班のパワー減～活動縮小均衡
・草刈り整備範囲をベースキャンプ及び彩りの森中心に縮小

・花班

2017 年：春夏秋冬一年を通し花の途切れないフィールド作りをスタート
・山野草園、菖蒲園、アジサイ園、自転車道沿い花壇、七草園、花生姜園、茗荷園等の整備
2018 年：花壇の花に名札立て作業及び全体の柵作り
・アヤメ、金魚草、ゲンペイアスター、キンセンカ、スノーフレーク、アジサイ、レンゲ、百日草、ウマノスズクサ、桔梗、皇帝ダリア整備他
2019 年：ならやまで育てた花「写真で見る花畑」で約 120 種類の花掲載
・アダプトプログラムの自転車道沿い花壇の整備
2020 年：道行く人が遠目からでも楽しめる背高の花、花木を手がける
・七草の採取（七草粥作り）、ひまわり、コスモス、ツバキ
・アジサイ移植、秋海棠の施肥柵作り
2021 年：活動範囲を縮小し自転車道沿いとアジサイ園を中心に

・ビオトープ班

ならやま西池：
2010 年 4 月　ビオトープ池として完成以降、水性生物調査を隔週実施
2017 年 4 月　水性生物調査を 3 週間に一回に変更
2018 年 8 月　排水路の改修工事

ならやま東池：
2012 年 3 月　灌漑用溜池を改修工事して現在にいたる

タナゴ池：
2011 年 10 月　近畿大学から依頼を受け、奈良県産ニッポンバラタナゴ育種決定　以来その育成に取り組む。ニッポンバラタナゴ、シマヨシノボリの育種に成功後、一進一退の状態。

2019 年４月　田貝を入れた籠を金網で囲い、田貝の育種方法見直し

2020 年４月　タナゴ池までの水路、池の法面の補修

ドジョウ池：

2016 年４月　タナゴ池の南側に造成、ドジョウ育種開始　（その後中断）

2021 年２月　田貝の育種に向けて改修工事、周辺の排水路を整備、田貝の育種開始

ハス池：

2016 年４月　タナゴ池北部の湿地にレンコン栽培用の池を造成(毎年ハスの花が咲く)

湿地：2017 年２月　南北木道、　2019 年８月　東西木道　完成

＜パトロール G＞

2016 年：パトロールコース案内看板設置。観察路でカエンタケ発見。
丸太階段は４０箇所に拡大。

2017 年：ショウジョウバカマやツルリンドウの保護柵、野草園構想開始。
No４コース観察路北壁急斜面を整備。ササユリ保護のための協働活動観察路整備。
メンテナンス班新設

2018 年：A 地区を No１コースに追加して整備。赤岳野草園のカンゾウ植え付け。
メンテナンス：緑陰広場水路付け替え整備。

2019 年：観察路の急斜面に梯子式階段を作成整備。枕木によるメイン階段整備。
パトロール班の生い立ち（2007 春～2013 春）起草（守口さん）

2020 年：展望広場とエントランス広場を造成整備。

2021 年:観察路見直し(4 コース⇒3 コースに)。　学びの森に広場造成、モニュメント製作。

＜果樹グループ＞

2019 年：以前の果樹：ウメ・八朔・レモン・カボス・イチジク・クリ・グミ・ユズ

2019 年：果樹チーム発足　実りの森にブルーベリー・西条柿・スモモ・アンズの苗を植える

2020 年：果樹グループ発足　実りの森全体の整備管理を担う
ザクロ、サクランボを植樹、イチジクを移植

2021 年：レモン植樹

【3】社会貢献活動・イベント

＜Green Gift 地球元気プログラム＞

・Green Gift 地球元気プログラムとして小学生児童とその家族に自然の魅力と大切さを里山の自然の中で体感することを目的に、2014 年にスタート。同年３月シイタケイベント、５月、７月、８月に里山イベントを実施。2015 年には夏休み期間中に奈良県が提唱する「山と川の月間」に協賛する形で７月、８月、里山イベントを実施。奈良県下の小学生児童に配布されるイベントガイドブックにも掲載され参加者動員力が格段にアップした。

2016 年：２月にシイタケイベント、７月、８月に里山イベントを実施。３年間を１期とする

Green Gift プログラムの第３期（2014～2016 年）の取組みを終了。

2020 年：7 月の里山イベントから第４期３年間の取組みを再開したが、その後コロナ禍によりイベントは中止。

2021 年：7 月の里山イベントは開催されたものの、8 月のイベントは新型コロナウイルス第５波の影響をまともに受け中止。

＜朝日親と子の自然環境教室＞

・朝日新聞社・朝日学生新聞社後援、シニア自然大学校主催、当会が企画運営を担当

2017 年：5 月　自然環境教室、里山体験ではシイタケ榾木の天地返し、農事実習体験ではサツマイモの植え付け、ソラマメの収穫を実施。

2018 年：10 月 稲刈り体験、里山体験（立木の伐採）。

2019 年：10 月 稲刈り体験、里山体験（立木の伐採）。

2020 年：コロナ禍により 10 月に予定されていた行事は中止。

2021 年：10 月 稲刈り体験と里山体験（山遊び）。

＜シイタケ菌打ちイベント＞

・2009 年３月に公開イベントとして開始したシイタケイベントは、2014 年、2015 年、2016 年は Green Gift プログラムのイベントとして実施。同プログラムの第３期取組み終了後、第４期取組み開始までの下記期間は、再度当会独自の公開イベントとして実施した。

2017 年：2 月　シイタケ菌打ち、植樹、立木伐採と里山遊び実施。

2018 年：2 月　シイタケ菌打ち、植樹、立木伐採と里山遊び実施。

2019 年：2 月　シイタケ菌打ち、植樹、立木伐採と里山遊び実施。

＜芋ほりイベント＞

・2011 年 11 月から公開イベントとして開始。その後毎年秋に開催される恒例行事となった。2021 年 10 月に予定していたイベントはコロナ禍により中止となった。

＜山もり・てんこ森＞

・2011 年 7 月に初めて奈良県「山と川の月間」啓蒙行事「山もり・てんこ森」イベントに自然工作にて出展参加。その後会の恒例の行事となり毎年参加している。

2016 年：7 月　県野外活動センターにて竹のカスタネット・ブンブンゴマ出展。

2017 年：7 月　フォレストパーク神野山にて竹のカスタネット・ブンブンゴマ出展。

2018 年：7 月　県野外活動センターにてブンブンゴマ・のらくろのストラップ出展。

2019 年：7 月　森林技術センターにてブンブンゴマ・のらくろのストラップ出展。

2020 年：10 月 森林技術センターにてブンブンゴマ・ジュズダマブレスレット出展。

＜平城京天平祭＞

・2013 年５月に自然工作にて参加してから 2016 年を除いて毎年出展。

2017 年：５月　クマのペンダント、ブンブンゴマ、ジュズダマブレスレット出展。
2018 年：５月　クマのペンダント、ブンブンゴマ、ジュズダマブレスレット出展。
2019 年：５月　ジュズダマブレスレット、竹のこいのぼり出展。
2020 年、2021 年：コロナ禍により２年連続して平城京天平祭そのものが開催中止。

＜佐保川わいわい桜祭り＞

・2014 年４月に佐保川地域社会福祉協議会、自治連合会主催のイベントに出展参加して後、毎年参加し、恒例行事となっている。

2016 年：４月　竹の無事カエル自然工作と食品バザー模擬店出展。
2017 年：４月　ジュズダマブレスレット自然工作と模擬店出展。
2018 年：３月　イヌ・こいのぼり自然工作と模擬店出展。
2019 年：３月　ジュズダマブレスレット自然工作と模擬店出展。
2020 年、2021 年：コロナ禍により２年連続して桜祭りそのものが開催中止。

＜佐保台小学校稲作体験学習＞

・2009 年６月、佐保台小学校５年生児童への「水稲栽培体験学習」を開始。
その後、毎年５月事前学習、６月田植え、７月観察、10 月稲刈りを実施。恒例行事となった。

2020 年：コロナ禍により 10 月の稲刈りのみ実施。
2021 年：６月田植え、10 月稲刈り実施。

＜アースデーin なら＞

・「国営飛鳥歴史公園石舞台」芝生広場でのならコープ主催の環境イベント「アースデーin なら」には 2003 年４月から毎年参加していたが 2017 年を最後に参加を見送り。

2016 年：４月　ブンブンゴマ、クマのペンダント自然工作出展参加。
2017 年：４月　モックン、カエルのストラップ、ジュズダマブレスレット自然工作出展参加。

【4】自然文化部

＜月例研修会＞

2016 年：12 月　北山の辺の道を訪ねて
2017 年：２月　馬見丘陵　探鳥会、３月　楽しい明日香古墳と万葉歌碑巡り、
４月　室生の里お花見ツアー、６月高取城址から土佐街道を歩く、
８月　三之公川上流「水源地の森」の自然に触れる、

10月　高知・牧野植物園（一泊）、12月　斑鳩三塔と藤の木古墳を巡る
2018年：2月　二階堂、稗田環濠、羅城門跡、4月　曽爾高原、屏風岩公苑花見
6月　葛城古道、8月　西大台ケ原散策、10月　飛騨・乗鞍・白川郷（一泊）、
2019年：2月　太子道から広瀬神社、4月　三名椿・寺院・桜巡り、6月　柳生街道
8月　明石海峡大橋登頂、10月　十津川（一泊）、12月　大和三山散策
2020年：2月　明神山から太子道、12月　當麻寺・二上山
2021年：4月　笠置山、6月　古代の官道・横大路、11月　大台ケ原と奥大和（一泊）

＜自然観察会＞

「自然教室」チーム:会員向け自然観察会及び出前教室･放課後子供教室等学習支援実施。
「自然工作」チーム:イベントでの出展と工作材料の製作。

2016年：4月　奈良公園自然観察会･桜見物､7月 育英小学校出前教室
6月 ならやま自然観察会　､佐保台小学校放課後子供教室･植物観察
8月 平城宮跡燕の塒入り、
9月 佐保台小学校放課後子供教室･昆虫観察､矢田丘陵自然観察会
10月 ならやま自然観察会､11月 月例研修会共催馬見丘陵公園
12月 奈良公園自然観察会･紅葉狩り
2017年：1月 ならやま自然観察会･春の七草､4月 奈良公園自然観察会･桜見物
5月 ならやま自然観察会
6月 奈良公園･子鹿観察､育英小学校出前教室､佐保台小学校放課後子供教室
8月 平城京､燕の塒入り観察
9月 佐保台小学校放課後子供教室･昆虫観察､矢田丘陵自然観察会
11月 奈良公園自然観察会･紅葉狩り
12月帝塚山小学校アフタースクール（大渕池公園自然観察会）､奈良公園ムササビ観察
2018年：3月 ならやま自然観察会､帝塚山小学校アフタースクール（大渕池公園で自然遊び･工作）
4月 奈良公園自然観察会･桜見物､5月 ならやま自然観察会
6月 佐保台小学校放課後子供教室･植物観察､育英小学校出前教室･植物観察･田植え､奈良公園･子鹿観察
8月 平城京､燕の塒入り観察 ､9月 佐保台小学校放課後子供教室･昆虫観察
9月 育英小学校出前教室･稲刈り･脱穀､生駒山滝寺周辺自然観察会
11月 奈良公園自然観察会･紅葉狩り
2019年：3月 奈良公園自然観察会･桜見物
6月 歌姫街道自然観察会､育英小学校出前教室､佐保台小学校放課後子供教室･植物観察､矢田丘陵自然観察会
9月 佐保台小学校放課後子供教室･昆虫観察､奈良公園自然観察会
10月 平城京自然観察会､11月 奈良公園自然観察会･紅葉狩り
2020年：3月 大渕池公園自然観察会
コロナ禍により､会員向け自然観察会はもとより､佐保台小学校放課後子供教室､育英小

学校の出前教室等の学習支援活動も全て中止となった。

2021 年：4月 奈良公園桜見物（一年ぶりに今年度初めての自然観察会を実施）

9月 矢田丘陵自然観察会（感染が一時収まり、対策を講じ田代先生による観察会実施）

11月 奈良公園自然観察会（雨天により 10 月 25 日をこの日に変え観察会実施）、

奈良公園紅葉狩り（自然観察チーム単独での観察会実施）

コロナ感染予防対策を取りつつ午前中のみの自然観察会を一部実施するも、佐保台小学校放課後子供教室、育英小学校の出前教室等の学習支援活動はコロナ禍により全て中止となった。

【5】クラブ活動

＜そば文化クラブ＞

2010 年：ならやま・そば文化クラブ」スタート　会員数 20 名

そば栽培を農業法人、桜井の「荒神の里　笠蕎麦」に学ぶ

役割はならやまの景観づくり/会の親睦交流/そば打ち自主研修（田辺氏招聘）

毎年、新そば祭りにてならやまで新そばを味わう

2017 年： 佐保自然の森、実りの森、彩りの森に栽培。景観保全活動の先駆けとしての使命感と「栽培から蕎麦打ち迄」のロマンを追い求めたが、収穫量８３kg をピークに減少をたどりだす。

2019 年：減少傾向のそば畑への土壌改善、水対策など試みるも収穫３kg　そば作りの終焉へ

2020 年：そば文化クラブは一旦終了し同好会として存続（会員数２５名）

＜歴史文化クラブ＞

2017 年：一泊研修「越の国に継体大王のルーツを訪ねる」　奈良近郊歴史探訪など６回

参加者 170 人

2018 年：泊研修「吉備王国とヤマト王権」　奈良近郊歴史探訪など　８回　参加者 252 人

2019 年：界文化遺産・百舌鳥古墳群および奈良近郊歴史探訪　６回　参加者 150 人

2020 年：元史と座学「興福寺と大安寺」　１回　参加者 22 名

(その他はコロナ禍により中止または延期)

＜クラブ・ユートピア＞

2017 年：アカマツ林の一部残存を確認し整備開始

2018 年：９月　クラブ・ユートピア発足

アカマツ林の再生と特用林産物復活を目指した活動開始

【6】広報

＜会報の発行＞

2001 年 12 月　機関紙「奈良。人と自然の会」創刊、2011 年 4 月　誌名を現在の「ネイチャーなら」に変更。活動の記録、会員への報告、花・虫・鳥などの観察記録・講座や俳句・詩・コラム・随筆・絵画工芸など多彩な内容で毎月発行している。

2017 年 1 月　創立 15 周年記念誌発行
2018 年 9 月　会報「第 200 号記念号」発行

＜ホームページの運営＞

2008 年 7 月に開設。2013 年 1 月に「会報誌」を創刊号にさかのぼって総て収録
2019 年 9 月　ホームページの構成を大幅にリニューアル

【7】褒賞

2017 年 4 月 28 日　「平成 29 年緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」受賞
〔第 11 回みどりの式典･東京憲政記念会館にて〕
2018 年 12 月 3 日　「環境保全活動表彰」受賞〔シニア自然大学校にて〕
2021年 11 月 22 日「第 32 回緑の環境プラン大賞ポケットガーデン部門コミュニティー大賞」受賞
2021 年 11 月 3 日　「緑綬褒状」受賞

【8】助成金等

・全労済環境活動助成（ろうきん）　2006，2009/4 から 1 年間
・損保ジャパン「地球クラブ社会貢献ファンド」　2006，2008，2009，2011，2012/4 から 1 年間
・セブン・イレブン記念財団・環境市民活動助成金　2008/4 から 1 年間
・三井物産環境基金（一般助成）　2008/4 から 3 年間
・なら・未来創造基金（奈良 NPO センター、奈良中央信用金庫協賛）2010/7 から 1 年間
・タカトリの寄付金を活用した「地球温暖化防止事業」補助金（奈良県）2011/4 から 1 年間
・子供ゆめ基金助成金（国立青少年教育振興機構）　2011/4 から 1 年間
・瀬戸内オリーブ基金環境助成金　2011，2013/4 から 1 年間
・アサヒビールからの寄付金を活用した「奈良県の里地・里山保全事業」補助金（奈良県）2012/4 から 2 年間
・三井物産環境財団環境活動助成金　2012/4 から 3 年間
・積水ハウス基盤助成　2012/4 から 1 年間
・公益信託経団連自然保護基金支援金　2015/4 から 1 年間

（以下、2016 年以降にいただいている助成金）

・ならコープ環境保全活動助成金　2005/7 から毎年
・Green Gift プロジェクト（東京海上日動火災）2013/10 から 3 年間、2019/10 から 3 年間
・森林・山村多面的機能発揮対策交付金（林野庁）　2014/4 から毎年
・アダプトプログラム推進事業（奈良市）　2016/8 から毎年
・花王・みんなの森づくり活動助成　2017/3 から 3 年間
・イオン環境活動助成　2012/4 から 1 年間、2019/4 から 2 年間
・コメリ緑育成財団　2018/4 から 5 年間
・トヨタ環境活動助成プログラム　2019/1 から 2 年間、2021/4 から 2 年間
・緑の環境プラン大賞（都市緑化機構、第一生命財団）2021/11～2022/3

【9】図録の編纂発行

＜図録「見つけよう自然のなかまーならやまの昆虫と植物たちー」の編纂発行＞

2018 年 7 月　トヨタ環境活動助成プログラム第一次選考通過
2018 年 8 月　図録「見つけよう自然のなかまーならやまの昆虫と植物たちー」の編集委員会を立ち上げる。その後、随時委員会開催
2018 年 9 月　図録表紙デザインの公募(会員の家族・佐保台小学校児童)
2018 年 10 月 トヨタ環境活動助成プログラム本選考通過・助成決定
2018 年 12 月 表紙デザイン選考委員会にて、最優秀賞(1 名)・優秀賞(2 名)・佳作(2 名)決定
2019年 1 月　表紙デザイン入賞者表彰式(奈良市中部公民館にて)
2019 年 3 月　印刷完了
2019 年 4 月～ 国立国会図書館、全国都道府県立図書館、奈良市立小学校、その他関係機関などに寄贈
2019 年 4~6 月　朝日新聞奈良版、毎日新聞奈良版、奈良新聞、産経新聞奈良版に掲載
2019 年 8 月 22 日 朝日新聞・天声人語に掲載、全国津々浦々から問い合わせのメール

＜図録「見つけよう自然のなかまーならやまの木々たちー」の編纂発行＞

2020 年 9 月　図録「見つけよう自然のなかまーならやまの木々たちー」編集準備委員会の立ち上げについて幹事会に提案承認。その後、随時委員会開催するも新型コロナウイルス感染症の影響により、ZOOM 会議及び対面と ZOOM 併用等により実施
2020 年 10 月～　表紙デザインの公募(会員家族、佐保台小学校、佐保川小学校児童)
2020 年 10 月 トヨタ環境活動助成プログラム第一次選考通過
2021 年 1 月　表紙デザイン入賞者決定、最優秀賞(1 名)・優秀賞(2 名)・佳作(2 名)
2021 年 2 月　トヨタ環境活動助成プログラム本選考通過・助成決定
2021 年 2 月　表紙デザイン入賞者表彰(奈良市立佐保台小学校にて)
2022 年 3 月　印刷完了

活　動　風　景

ならやまプロジェクト

【協働活動】

アダプト周辺清掃

竹林整備

第２駐車場水はけ対策

カエデ・カツラの植樹

水路整備

シイタケ榾木天地返し

【里山グループ】

枝打ち

薪作り

伐採木の整理

アカマツ林の下草刈り

シイタケ収穫

【エコファームグループ】

野菜の種まき

水田のコナギ取り

野　菜　類　の　収　穫

【景観グループ】

繁茂する雑草の草刈り

山野草園の整備

池の水生生物調査

花壇の整備

西池の泥上げ

【パトロール・メンテグループ】

観察路の丸太階段整備

希少植物保護柵作り

エントランス階段の草取

パトロール・メンテ出発

水路の補修

【果樹グループ】

南高梅の収穫

ブルーベリーハウス

キウイの苗床整備

通路の整備

柿の収穫

月例研修会風景

2017.4　室生の里で花見

2017.6 高取城址から土佐街道

2017.8 川上村水源地の森

2017.12 斑鳩三塔と藤ノ木古墳

2018.2 下ツ道を歩く

2019.8　明石海峡大橋　橋梁最上階へ

2018.10 大台ケ原（西大台）散策

2019.2 太子道から広瀬神社

2019.4 白毫寺の五色椿

2019.6 柳生街道

2019.12 大和三山散策

2020.2 明神山から太子道

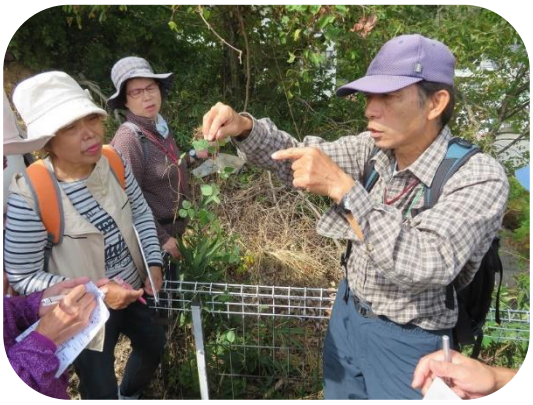
2020.12 當麻寺から二上山

2021.4 笠置山

自然文化活動風景

2018 年春　春の奈良公園　シデコブシの観察

2018.5　ならやま自然観察



2018 年秋　生駒山滝寺周辺

2019．6　大和民俗公園

子供たちに自然の大切さを伝える

育英小学校　校庭の自然観察

佐保台小学校放課後子供教室

佐保台小学校　田植え体験学習

佐保台小学校　稲刈り体験学習

一泊研修風景

2017.10 高知・牧野植物園

2018.10 飛騨・乗鞍・白川郷

2019.10 十津川

2021.11 大台ケ原

親睦交流の風景

新春餅つき

10 年継続会員記念植樹

新入会員歓迎会

春の感謝祭

新そば祭り

芋煮会

図録編集･活用風景

図録委員会(昆虫と植物編)
「見つけよう自然のなかま～ならやまの昆虫と植物たち」

図録委員会(樹木編)(ZOOM)
「見つけよう自然のなかま～ならやまの木々たち」

「昆虫と植物編」で表紙デザイン最優秀賞に輝いた
中川美登里さん

「樹木編」で表紙デザイン最優秀賞に輝いた
中野里々花さんの作品

図録で自然学習

イベント・アラカルト（１）

昆虫採集や水生生物の観察に興味深々

楽しい飯盒炊さん

シイタケの菌を植えた後は、立ち木の伐採、コナラの植樹

そして、遊びの森で、自然と戯れ、最後にはきちんと復習

稲刈りや芋ほりもやりました

イベント・アラカルト（２）

アースデイ in なら　自然工作

天平祭ではこいのぼりを作りました

山もりてんこもりイベント　ボーイスカウトが来てくれました

佐保川ワイワイ桜まつり　みんな美味しい美味しいで売り切れました

新春講演会

2017 年　作家・詩人　寮美千子様
「父は空　母は大地　先住民の思想」

2018 年　京都光華女子大学　菅井啓之先生
「自然からいのちのあり方を学ぶ」

2019 年　甲南大学　田中修先生
「植物の生き方に学ぶ」

2020 年森と水の源流館　木村全邦先生
「生物多様性とつながる私たちの暮らし
自然が大事なのは何で？」

2021 年　神戸大学大学院　黒田慶子先生
「都市近郊の里山資源の活用」
初めてのリモートによる講演会でした

褒賞関係

▲平成 29 年度緑化推進運動功労者
内閣総理大臣表彰状

▲平成 29 年度緑化推進運動功労者
内閣総理大臣表彰楯

▲令和3年・緑綬褒章

▲第 32 回緑の環境プラン大賞

令和３年 秋の叙勲・褒章　第 37 回危険業務従事者叙勲 伝達式記念　令和３年 12 月 10 日 於:奈良県庁
後列左端：千載会長

平成２９年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰

▲受賞式・レセプション　於：憲政記念館

受賞記念祝賀会　於：奈良ロイヤルホテル

奈良・人と自然の会
緑化推進功労表彰

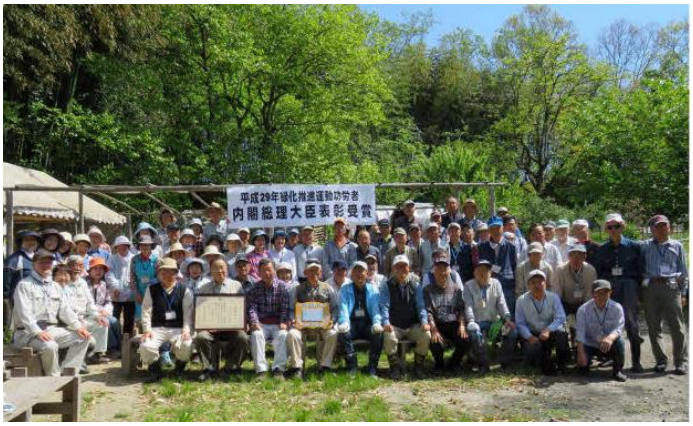
奈良市のボランティア団体「奈良・人と自然の会」＝写真＝が緑化推進運動功労者として内閣総理大臣表彰を受けた。シニア世代中心のメンバーたちは「首の里山を覆えている最後の世代として、知らない世代につなげたい」と意気込んでいる。

同会は2001年設立。定年退職後の元会社員ら約150人が在籍。県の委託を受け、同市の歴史的風土特別保存地区である平城宮跡地区（通称ならやま）16haで、「日本の原風景を取り戻そう」と、里山の保全活動に取り組んできた。

生態系を調査し、放置林の間伐や田畑の復元を行う。健康な木々が集団で枯れる「ナラ枯れ」対策では、約2000本の里山林を保全した。近隣の小学校の環境教育にも協力し、活動を知った住民が加わるなど活動の輪を広げている。

鈴木実一会長（75）は「地道な努力が社会に認知され、励みになる。ここを起点に、里山の風景を取り戻す活動を広げたい」と話す。

▲読売新聞　2017/6/24



▲受賞記念撮影　於：ならやまＢＣ

平成29年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰(2017 年4月 28 日)

国土交通大臣	神戸　直日
文部科学大臣	杉山　嘉英
丸田　頼一	釧路町立遠矢小学校
内閣官房長官	栗山町ハサンベツ里山実行委員会
沈　建仁	特定非営利活動法人 蔵王のブナと水を守る会
農林水産大臣	ＮＰＯ法人　ちば里山トラスト
環境大臣	さがみ野やすらぎ街づくり委員会
	奥大野村づくり委員会
	西山森林整備推進協議会
	奈良・人と自然の会
	住友ゴム工業株式会社 宮崎工場
	鹿児島市立西紫原小学校

創立15周年記念式典 夢・未来を語る集い

創立15周年記念式典は、「夢・未来を語る集い」として、平成29年1月22日に開催しました。寮美千子さんの記念講演に引き続き、「夢・未来を語る集い」として祝賀会を開催。会長の開会の挨拶に続き、佐野勝奈良県くらし創造部次長、仲川げん奈良市長からご祝辞をいただきました。川井顧問の発声で始まった懇親会では、ご臨席の皆様方から、お祝いのスピーチをいただき、5年10年先の未来像などについて大いに語り、歌い、盛況のうちに滞りなくお開きとなりました。

ナラ枯れ 戦う素人山守

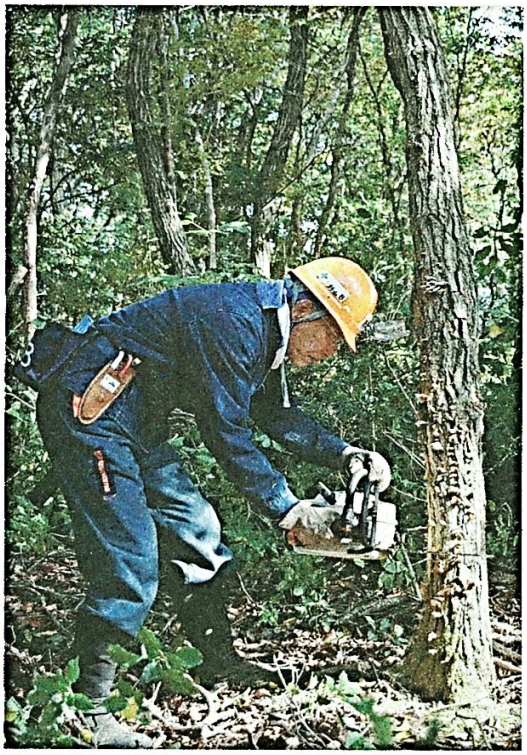
ならやま2000本 1本ずつ管理

奈良・人と自然の会

健康な木々を集団で枯らす伝染病「ナラ枯れ」から、歴史の地の里山を守る静かな戦いが続いている。対策を始めて5年、今年の被害はわずかに6本。歴史的風土とともに受け継がれてきた森を次の世代へつなごうと奮闘するのは、「経験も金もないが、熱意だけはある」と自称する〈素人山守〉たちだ。（大橋彩華）

枝のみずみずしさが失われた木が、目前で切り倒された。「これが去年までに感染した枯死木。こうして切っていけば、じきに健康な森に戻ります」。ボランティア団体「奈良・人と自然の会」副会長の森英雄さん(73)が教えてくれた。

コナラを中心に多様な木々が重なり合う雑木林。その向こうを、ゴーッと音を立てて電車が通り過ぎる。歴史的風土特別保存地区の平城宮跡地区（奈良市）の一角、通称「ならやま」。JR平城山駅にほど近く、国道24号に接する里山だ。



（上）枯れた木を切る会員。子どもたちに引き継ぐ「永続的な森作り」を目指す（奈良市で）（下）対策を始めて4年目のならやま里山林（点線内）。周辺と比べ、赤茶色に変色したナラ枯れ被害が少ない（2014年8月）＝県提供

木々の間を縫うように続く観察路を登ると、幼木が並ぶエリアに行き当たった。間伐して森に光を入れたら、地表で眠っていたマツの種が芽吹いたという。

「山にはそれぞれ力がある。そのパワーを使おう、と思ってやってきました」と森さんは目を細める。

■11年に本格着手

ナラ枯れは、体長約5ミリの甲虫「カシノナガキクイムシ（カシナガ）」が、幹に穴を開けてカビを運び込むことが原因。感染すると水を吸い上げる機能が低下し、夏場に一気に枯れる。1990年代以降、全国で問題となり、県内でも被害は年々増加。昨年度は前年度の3・5倍を超えた。

同会は2007年から、県の委託を受け、ならやまの再生に取り組んできた。3年後、約5キロ東の森林でナラ枯れが発生したとの知らせが届いた。全国的に猛威を振るっていると聞いてはいたが、それがすぐ近くまで来ている。

ならやまは、被害を受けやすい老齢木が多い上に、孤立した林だ。森林総合研究所の専門家の予測では「カシナガが入ってくれば7割の木が犠牲になる」。森さんらは11年から、本格的な対策に着手した。

■地道な作業続く

里山林を30区画にブロック分けし、コナラ1本1本に番号を振って管理台帳を作成。感染の目印は、カシナガが入り込んだ穴や、そこから出る木くずだ。毎週の活動日には、会員ら約20人が丹念に状態を記録し、穴があればつまようじで深さや角度を記録した。

作業は単純だが、手がけるエリアは約5ヘクタール、コナラは約2000本に及ぶ。退職者らが主力のメンバーらは、規模に圧倒されながらも地道に作業を進めた。

翌12年には初のナラ枯れを確認。侵入が激しい木は伐採し燃料に。被害が小さいものには他への感染を防ぐ処置を施した。木に近づくカシナガにわなも仕掛けたが「林全体を守るなら一本ずつ対応するしかない」。早期発見・早期除去が、唯一の鍵だった。

■被害5%に抑制

5年間の活動で、ならやまの被害を全体の5%にあたる約100本に抑えた。実績が評価され、今年の都市緑化機構「緑の都市賞」の奨励賞も受賞した。

同会はならやまを県内小学生の森林環境教育の場として活用している。「葉が枯れ、幹が倒れた里山には、子どもたちを連れてくることもできない」と森さん。ナラ枯れ解消後は、工作の材料に使える木を集めた森を作ったり、山桜を植える構想もある。

木漏れ日で種がよみがえるように、幼い頃に触れ合った自然は、ふとしたときに思い出すはず。「子どもたちの心に根を張る。そんな里山を守っていきたいですね」と森さんは話した。

▲読売新聞・奈良版　2016.12.21

里山保全 楽しみ10年

奈良・人と自然の会

奈良市の市民団体「奈良・人と自然の会」が、平城宮跡北東にある里山の保全に取り組んで10年になる。縁を次世代に引き継ぐため、シニアらが毎週仪を動かし、思い思いに楽しみながら活動を続けている。

▲立ち枯れ状態になった木を切り倒す
▼畑の手入れをする会員ら＝いずれも奈良市

JR平城山駅近く、交通量の多い国道24号から脇道に入ると、急に景色が変わる。日当たりの良い林や畑が広がる、昔ながらの田園風景だ。作業服姿の会員が「別世界でしょう」と笑顔で迎えてくれた。

会は2001年の設立。生駒市で棚田再生に取り組んだ実績を買われ、07年に県の委託を受けて、この里山の再生に取り組む。

約16㌶の県有地は長らく放置されていた。背丈の竹ほどの草を刈り、不法投棄されたタイヤや自転車を片づけるのに約2年かかった。観察路を通し、枯れ木を撤去した。林で余分な枝を落とすと、地表に日が差し、ツツジが咲いた。

畑などを作り、他にビオトープを整備した。近隣の人が散策するようになり、今では小学生の環境教育の場にもなっている。切り倒した木はマキにして販売し、運営費に充てる。シイタケ栽培も軌道に乗っている。

活動は毎週木曜朝。「里山」「エコファーム」などの班ごとに行動する。11月の活動日を見学すると、朝9時の朝礼から始まった。各班が「コナラを伐倒します」などと作業内容を確認し、約70人の参加者はラジオ体操をして作業に入る。

平均70歳超「体動かし気持ちいい」

里山班は観察路に入った。課題はナラ枯れ対策だ。約2千本のコナラに番号を振って管理している。菌を媒介する虫の跡を点検し、広がる前に切って被害を全体の1割以内に抑えている。南会長の森英雄さん（74）＝河合町＝は「放置された林ではナラ枯れが一気に広がる。人の手が入る里山だから最低限の被害ですんでいます」と話す。

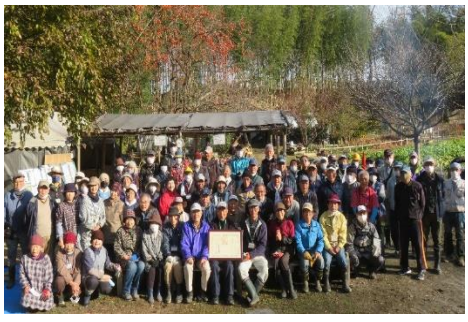
平地の畑ではソバの脱穀やタマネギの植え付けが進む。草刈りや丸太階段の補修をする人もいる。一汗流して昼時になると、炊き出し班が豚汁をふるまった。

会員は定年退職した元会社員などのシニア世代が中心で、約150人の平均年齢は70歳を超える。大阪府や京都府、滋賀県から数時間かけて通う人もいる。参加者は「強制がないし、体を動かすと気持ちいい」などと口にする。

奈良市法華寺町に住む鈴木末一会長（75）は幼いころ、家族でよくこのあたりを訪れた。「荒れていた里山が昔の姿を取り戻していくのがうれしい。自然は子孫から借りていると思って、日本の原風景を引き継いでいきたい」と話した。問い合わせは鈴木さん（0742・33・4853）。

（吉沢綱英）

▲朝日新聞　奈良版　2017.12.15



完成した図録の表紙＝奈良・人と自然の会提供

植物を撮影する木村裕さん（左）と西谷範子さん＝奈良市

ならやまの生き物を図録に

市民団体が出版 400種以上収録

奈良市の平城宮跡北東にある里山の保全に取り組む市民団体「奈良・人と自然の会」が、活動エリアに生息する生き物を紹介した図録を発行した。平均年齢70歳以上のシニア世代が中心の団体で、執筆、撮影、編集をすべて会員たちが行った。

図録のタイトルは「見つけよう自然のなかま―ならやまの昆虫と植物たち―」。A4サイズのフルカラーで、本文は88ページ。里でよく見かける生き物から絶滅危惧種まで400種類以上を収録し、1千部を発行した。

「トンボ類のチャンピオンです。いつも悠々となわばりを行きしています（オニヤンマ）」

「夏になると白い細かい花をつけますが、見つけられるかな？（セリ）」

昆虫や植物がやわらかい文章で紹介されている。添えられた写真は会員が10年以上かけて撮りためた。

「奈良・人と自然の会」が活動しているのは、奈良市のJR平城山駅の近くの里山約16ヘクタール。シニア世代を中心に約170人が所属。毎週木曜日の朝に集まり、畑を耕したり、林を間伐したり。年に数回、小学生を里山に招き、自然観察や田植え体験などをする「自然教室」も開く。

活動する中で、昆虫や植物の写真を撮影していた菊川年明さん(86)、木村裕さん(79)、西谷範子さん(79)。菊川さんは「貴重な昆虫を見つけたときは『やっと出会えた』というられしさがあります」と話す。子供たちに自然の魅力を伝えようと図録をつくろうと決めた。

会は図録を自然教室で子供たちに貸し出すほか、学校や図書館などへの寄贈を予定している。会長の鈴木　さん(77)は「昆虫や植物を自然の仲間と意識することで、より身近な存在として感じ取ってほしいです」と話す。問い合わせは会のメール（narayama@naranature.com）へ。（桜井隆至）

▲朝日新聞　奈良版　2019.4.23

天声人語

『見つけよう自然のなかまーならやまの昆虫と植物たちー』という図鑑を寄贈いただいた。奈良市の里山保全団体からで、平城山という丘陵地の豊かな自然が章ごとに息づく。十数年をかけて撮った鮮やかな写真にひかれて、現地を訪ねた▼手入れの行き届いた田や畑、ビオトープや養蜂場。図鑑を見て想像した通りの風景が広がる。保全に取り組む「奈良・人と自然の会」は平均年齢72歳と聞いて驚く。現役時代の職種は銀行員、公務員、オペラ歌手と多彩である▼「農林業に縁のなかった人がほとんどです。万一の急病に備え、名札の裏に家族や主治医の連絡先を書いています」と会長の鈴木末一さん(77)は笑顔で話す。集まるのは週に1度木曜のみ。ラジオ体操をしてから、林の間伐や野菜作りを楽しむ▼発足は2001年。県有地約16㌶の再生・保存に取り組んできた。伸び放題の草を刈り、投棄されたタイヤや自転車を撤去。枯れ木を切り、水路を引き、観察路を通した▼里山保全の団体は各地にあるが、維持し続けるのは至難の業だろう。「参加を強制せず、現役のころの肩書を詮索しないのが秘訣です」。大工仕事の好きな人、虫に詳しい人、資金集めにたけた人など特技はさまざまだ。会員170人に年齢を掛ければ、知恵と経験は延べ1万2千歳を超す▼この週末には、カレーを食べて自然観察をする会を開く。秋には芋煮、冬はシイタケの菌打ち。四季折々、手入れの行き届いた里山に住民たちの歓声が響きわたる。

▲朝日新聞・天声人語　2019.8.22

身近な自然に関心を

奈良・人と自然の会

昆虫・植物、図録に

奈良

「奈良・人と自然の会」は、奈良市北部のならやま約16㌶に生息する昆虫と植物それぞれ200種を写真を添えて説明する図録「見つけよう自然のなかまーならやまの昆虫植物たち」（オールカラー、A4判88㌻）を刊行した。1000部作製。奈良市内の全小学校と全国の都道府県立図書館などに1冊ずつ送った。

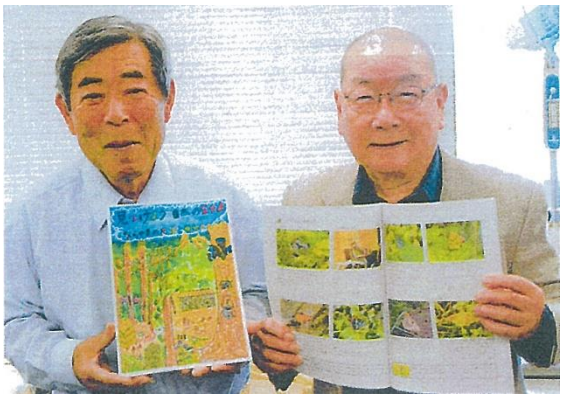
小学4、5年生を読者として想定した。昆虫は生態別分類と季節ごとの分類がある。植物は生態ごとに分類した。表紙には、公募で選ばれた市立佐保小5年、中川美登里さんの絵を使った。

会員には昆虫に詳しい人や植物のデータを趣味で集めてきた人がおり、子供たちが身近な自然に関心を抱くきっかけになればと図録を作った。ならやまで実施する自然観察会でガイドブックとして貸し出す。

同会は2001年設立。07年からならやまの管理を県から委託されている。当初はクマザサが生い茂り、不法投棄されたごみが散乱していたという。毎週木曜が活動日で、里山や花壇、ビオトープの整備、エコファームの運営などをしている。

ならやまはかつてアカマツが多く、マツタケも採れたが、松枯れが進んで今はコナラやクヌギが主体という。鈴木末一会長は「子供のころにまきを集めによく行った。日本の原風景の里山を取り戻し、子供たちに残したい」と話している。

図録は希望者には協力金1000円で譲る。連絡は鈴木会長にメール（nara-suzuki@naranature.com）で。【大川泰弘】



完成した図録を示す鈴木末一会長（左）と編集委員の吉川利文さん＝奈良市内で

▲毎日新聞・奈良版　2019.5.22

「ならやま里山林」に生息の昆虫・植物各200種

図録から関心持って

環境保全の団体が発刊　珍しい昆虫も掲載

奈良市の県道「ならやま大通り」の南に広がる「ならやま里山林」など約16㌶の環境保全に活動する「奈良・人と自然の会」（鈴木末一会長、約170人）は、同地域の昆虫や植物を紹介する図録「見つけよう自然のなかま―ならやまの昆虫と植物たち」をこのほど発刊。同市内小学校などに寄贈するほか、夏の公開イベントで役立てる。鈴木会長（77）は「類のない図録。人間も自然の一部なんだと、関心を持ってほしい」と話す。

同会は平成13年9月に創設。同19年から県の要請を受けて放置山林を整備し、市民参加型で活動。同29年には総理大臣表彰を受賞している。今回、昆虫や植物の写真を撮っていた会員3人の記録を生かそうと、トヨタ環境活動助成プログラムの助成を受けて同図録を発刊した。

図録は昆虫、植物各200種を紹介。昆虫はいとなみ編と四季編を、植物は水生植物、食べられるものなど特徴別に分類した。約2200㌔を渡る蝶「アサギマダラ」や、体長約12㍉のハラグロオオテントウなど珍しい昆虫も掲載されている。

一部公募した表紙は、会員の孫の中川美登里さん（市立佐保小5年）が森林を描いた伸びやかな絵が飾る。

A4判オールカラー87㌻。活動協力金1000円（税込）で販売可。問い合わせは鈴木さんメール、nara-suzuki@naranature.com

▲奈良新聞　2019..5.21

ならやまの生態 後世に

奈良・人と自然の会、図録発行

奈良市北部に広がるならやまの生態を紹介しようと、自然環境の保全に取り組む団体「奈良・人と自然の会」が、図録「見つけよう自然のなかま―ならやまの昆虫と植物たち」を発行した。小学校などに配布し、貴重な自然環境を後世に伝えることにつなげる。

昆虫と植物200種ずつ掲載

ならやまは京都府との境に東西に延びる丘陵地で、樹木や草花が豊富で、昆虫も多く生息。図録の作製はトヨタ環境活動助成プログラムの支援を受けて実現したもので、同会会員がならやまの一角約16㌶で長年撮影してきた昆虫と植物それぞれ約200種の写真を掲載している。

昆虫はいとなみや四季などの項目別に紹介。さまざまなチョウやカブトムシ、トンボ、セミなどを写真と説明で伝え、ハラグロオオテントウなど珍しい昆虫も。植物は「仲間をふやす知恵」「香りに特徴のある植物」「お金の名前の植物」といった項目もあり、興味を抱きやすい。表紙には公募で最優秀賞となった小学生の絵を採用した。

奈良・人と自然の会の鈴木末一会長は「昆虫も植物も人と同じように仲間。仲間をしっかりと見つめてもらい、環境保全につながれば」と話している。図録は活動協力金千円に対する礼として進呈する。問い合わせは、奈良・人と自然の会（narayama@naranature.com）。

▲産経新聞・奈良版 2019.6.16

奈良・人と自然の会 緑化推進功労表彰

奈良市のボランティア団体「奈良・人と自然の会」＝写真＝が緑化推進運動功労者として大閣総理大臣表彰を受けた。シニア世代中心のメンバーたちは「昔の里山を覚えている最後の世代として、知らない世代につなげたい」と意気込んでいる。

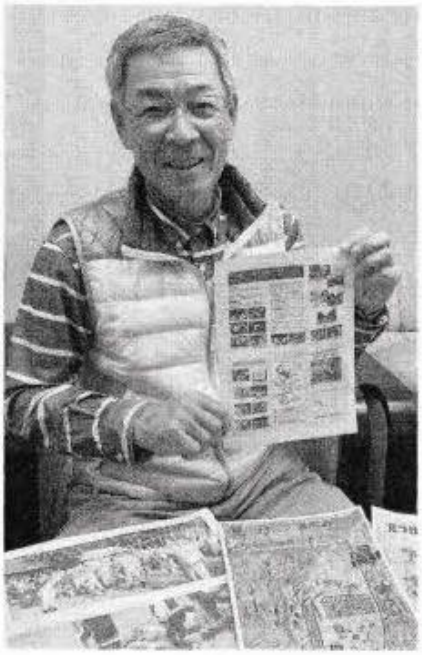
同会は2001年設立。定年退職後の元会社員ら約150人が在籍。県の委託を受け、同市の歴史的風土特別保存地区である平城宮跡地区（通称ならやま）16㌶で、「日本の原風景を取り戻そう」と、里山の保全活動に取り組んできた。

生態系を調査し、放置林の間伐や田畑の復元を行う。健康な木々が集団で枯れる「ナラ枯れ」対策では、約2000本の里山林を保全した。近隣の小学校の環境教育にも協力し、活動を知った住民が加わるなど活動の輪を広げている。

鈴木末一会長(75)は「地道な努力が社会に認知され、励みになる。ここを起点に、里山の風景を取り戻す活動を広げたい」と話す。

▲読売新聞・奈良版　2017.6.24

緑綬褒章（社会奉仕活動功績）



「奈良・人と自然の会」発刊の冊子や活動の資料を前に語る千載会長

奈良・人と自然の会

仲間と共に里山管理

平成13年、創立メンバー45人が「私たちは大和の自然を愛します」を合言葉に立ち上げた任意団体。現在、約160人の会員が里山再生保全、歴史・文化散策、子どもたちに自然の魅力を伝える自然教室開催など多彩な活動を展開している。

中でも注目されるのが平成15年から取り組む環境保全活動。19年からは県の委託を受け、奈良市佐紀町に広がる「ならやま里山林」で毎週木曜に活動している。参加は自由だが毎回70～80人が集まり、枝打ちや農作業など、約16㌶の里山の管理に汗を流す。千載輝重会長（72）は「たくさんの素晴らしい仲間と自然の中で活動する楽しさが、多くの参加につながっている」という。

創立20周年を迎えた今、会員の平均年齢は74歳。持続可能な活動のため、若い世代との連携も模索中だ。千載会長は「この受章は新たな一歩への大きな励みになる」と話す。

（奈良市）

▲奈良新聞　2021.11.2

会員名簿（2022 年 2 月 28 日現在）

青木　幸子
青木　芳一
浅岡　伸也
足立　勝洋
阿部　和生
有元　康人
飯島八重子
池田　富子
池田　信明
池山　良武
池山　怜子
石堂　純子
磯貝　　猛
井戸八穂子
井上　文男
岩崎　雅子
上西千代子
植野　益行
氏本　仁志
内河　洋文
内海　　緑
江角　幸代
大澤　教男
太田　和則
大畑むつみ
岡崎　節子
岡田　高志
岡田 俊司
岡田扶美子
岡田　安弘
奥谷佳由里
奥谷久那子
尾崎　信次
小田久美子
小田進八郎

越智　健介
笠井　文夫
勝田　　均
萱野　　勉
川勝　孝雄
菊川　年明
岸谷　和代
岸谷　順裕
衣笠　博美
木村愼司郎
木村　　裕
木村　宥子
清原　正彦
久保田康之
倉田　　晃
古結　博邦
小島　武雄
小橋　行雄
小山喜与男
境　　寛
桜木　晴代
佐竹　樹之
佐藤　　盤
佐藤　勝紀
更谷佳津子
澤田　好男
澤田恵津子
塩井　皓太
塩本　勝也
篠原　章二
四宮憲一郎
嶋田　良子
杉本　　登
杉山　耕二
杉山　征人

杉山　潤子
鈴木　末一
鈴木　経子
千載　輝重
高城　光一
高須　良子
高間　祥子
宝田　史子
武内　　豊
田代　一行
田中　克治
田中　克彦
田中　暉英
田中　善英
谷川　雅邦
田矢　恵造
辻　　敏美
辻本　愛子
辻本　信一
辻本　正子
辻本　正則
坪井　都子
寺田　　孝
寺野　金三
徳地　恵男
戸田　博子
冨井　忠雄
冨江　文雄
豊田　治代
中井　　弘
永井　幸次
中川　　徹
中川　瑛雄
中嶋 さよ子
中島　　進

中西　建夫
中西　光子
中野　達矢
中村　圭一
中村　勇二
梨本　　哲
西岡　正平
羽尻　　嵩
坂東　久平
坂東由紀子
東　　典子
平岡　久美
平川　宏和
平田　和子
平田　範光
平山美津子
平山　義正
枇杷原満喜
福田　美伸
藤田　秀憲
藤原　　勲
古川　幸子
古川　祐司
前　　弘之
前田　隆裕
増田　典男
松尾　　弘
松本　武彦
水本　遼眞
三瀬　英信
宮池　　明
宮崎　　仁
村上　雄之
村田　康晟
森　　和子

森　　英雄
守口　京子
八木　順一
八木　健彦
山内　京子
山上　伸子
山崎　久平
山中　笙子
山本　妙子
山本美智子
山本　隆造
吉川　公子
吉川　利文
吉田登志子
吉田　英子
吉村 さつき
渡辺　健造

以上157名

《編集後記》

◇　表紙の題字は、会員の池山怜子さんに揮毫していただきました。まさしくならやまの端正さがにじみ出ています。

◇　随所のページにオアシスであるかのような挿絵は、会員の岩崎雅子さんの作画によるものです。ならやまプロジェクト活動の一コマ一コマを生き生きとしたタッチで描かれています。

◇　「継続は力なり」。呱々の声を挙げて以来、今日までの汗と努力の結晶の集大成となればとの想いを込めて・・・。

◇　コロナ禍に翻弄された５年間でしたが、結構いろいろなことができたんだと振り返ることができました。さらに１０年後により満足のいく振り返りができればと思います。

◇　ページを何度も読み返し、会員の皆さまと楽しく活動できた年月を振り返ることができました。奈良・人と自然の会の会員でよかった。これからも・・・

◇　２０年の歩みはもちろん、これからの歩みの手がかりも盛り込まれました。会員の皆様の思いはずっしりした重みがあります

◇　当会に入ってまだ２年余り、歴史を知るという意味でも興味深く読み込ませていただきました。初期の試行錯誤からグループ制になったいきさつや、高齢化への危機感が分かってきたように感じます。

◇　奈良に住み 37 年になります。人との語らいと自然に親しむ日々を大切にしたい。

◇　この 5 年間の活動を振り返り、会を取り巻く人との出会いと絆の広がりを感じました。この出会いを大切にしたいと思います。

◇　20 年、歳月という流れの中に多くの人たちがいました。これからもこの流れが続き、新しい人たちが加わることを願っています。

記念誌編集委員会

委員長	鈴木　末一
副委員長	千載　輝重
委　員	青木　幸子
	青木　芳一
	岡田　安弘
	尾崎　信次
	田中　善英
	戸田　博子
	吉川　利文

２０年出会い重ねて　広がる未来
（創立２０周年記念誌）
令和４年３月３０日　印刷
令和４年３月３０日　発行

発行　奈良・人と自然の会
印刷　冊子印刷ドットコム